佛教傳說叢書第九卷

弘法大師

全

始

特103
992

佛教傳說叢書

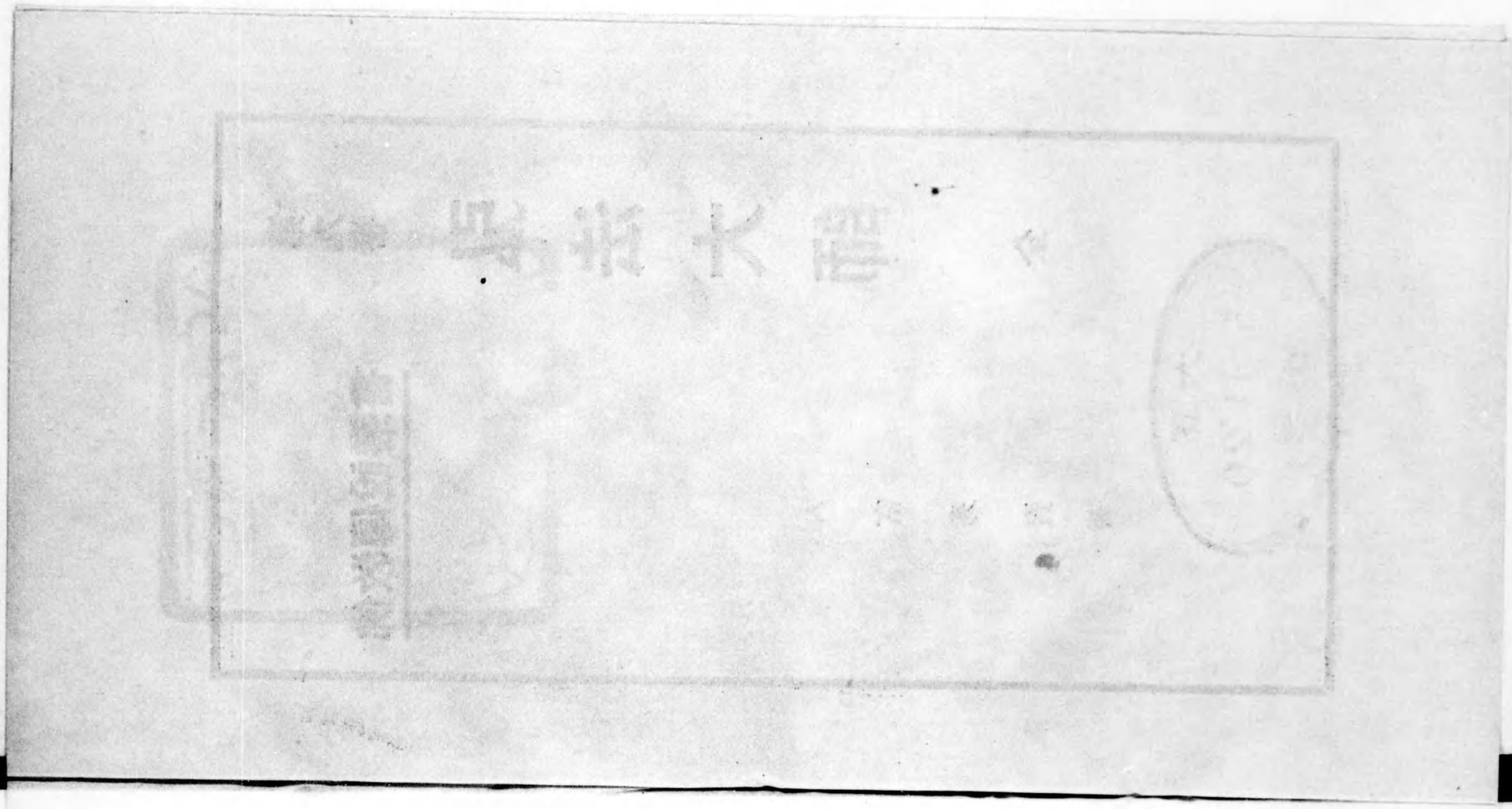
第九卷

弘法大師

全

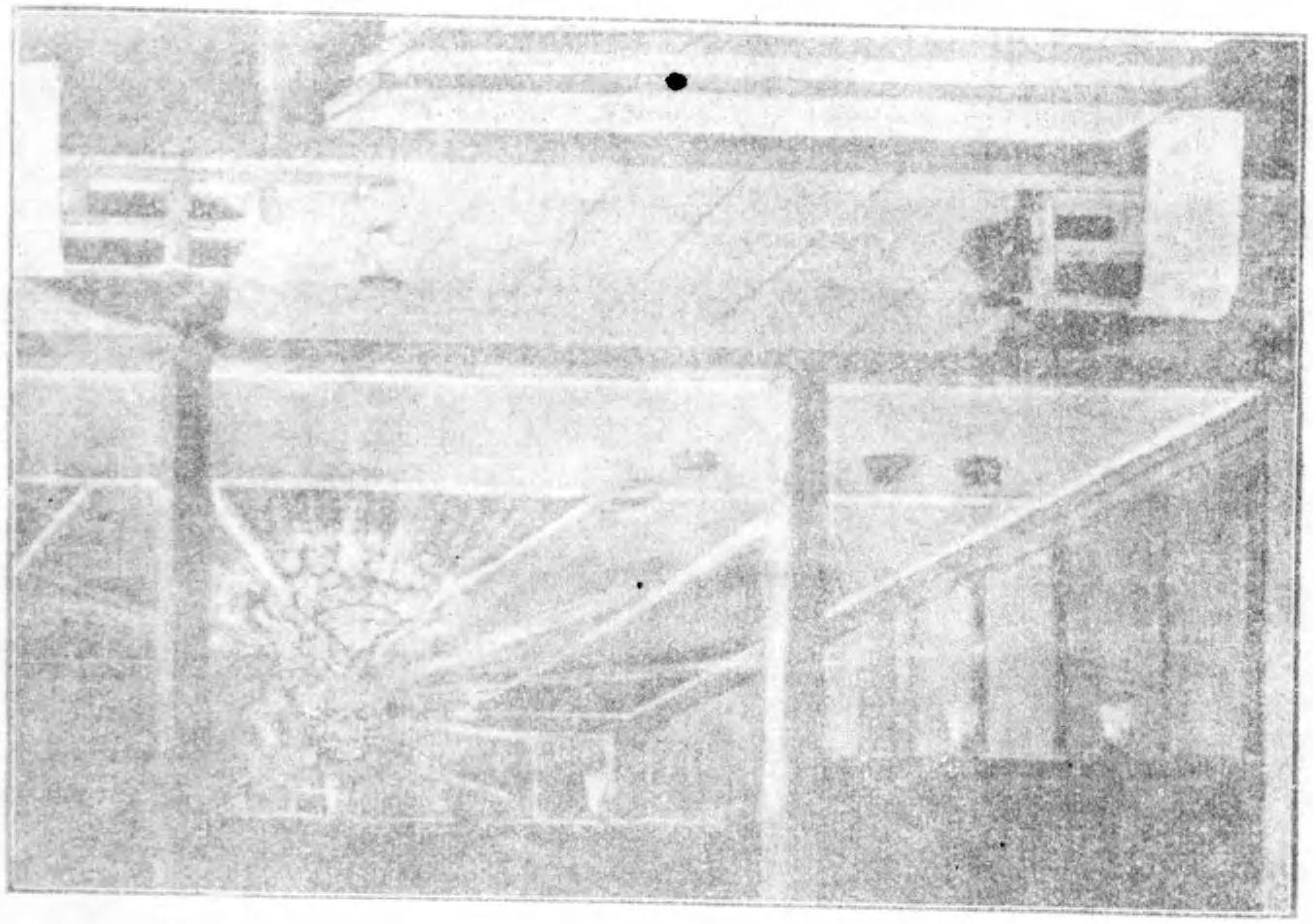
大富秀賢著

大正
5. 11. 20
内交



卽身成佛（口繪）

清涼殿の宗論は、孔雀經音義に出たり。大師無碍辯の詞義懸河の流滑りなく、三秘密の加持明鏡是れ明なり。一生の現修卽座の成佛文理極成する上、南方に向ひて契印を結び、眞言を誦して秘觀を凝し給ひし時、肉身忽に遮那の眞容と現はれ、鳳剛立さころに玻璃の妙界にかゞやき云々



即身成佛（口繪）

清凉殿の宗論に、孔雀經音義に出づ。大師無礙辯の詞義懸河の流滯りなく、三密の加持明鏡是れ明なり。一生の現證即身の成佛文理相成する上、南方に向ひて契印を結び、眞言を誦して祕觀を凝し給ひし時、肉身忽に遮那の眞容と現はれ、鳳闕立ところに玻璃の淨界にかゞやくと云ふ

略年譜終

寶龜五年（一　歳）　六月十五日讃岐國多度郡屛風ケ浦に誕生、幼名眞魚と稱す

同六　年（二　歳）　唐僧法進屛風の浦の民家に宿し眞魚の泣聲を聞き經陀羅尼を誦すと言ひこれを拜す

同十　年（六　歳）　毎夜八葉の蓮華に座して諸佛と語ると夢む、父母貴物と字す

同十一年（七　歳）　倭斯濃山に捨身して釋尊に誓ふ

延暦元年（九　歳）　問民苦使馬を下りて稱讃す

同七　年（十五歳）　始めて京師に出で儒學を修め、勤操大德の門に入りて虛

空藏求聞持の法を受く

同八　年（十六歳）　甥智泉生る

同十　年（十八歳）　初めて大學に入る聾瞽指歸を著し、勤操大德に付て近士となり無空と稱す

同十一年（十九歳）　聖地靈山を跋渉して心身を練る

同十二年（二十歳）　和泉槇尾寺にて出家得度し名を敎誨と號し後如空と改む

同十四年（二十二歳）　東大寺にて具足戒を受け名を空海と改む

同十五年（二十三歳）　佛前に心神を凝らし不二經を求めんと誓ふ

同十六年（二十四歳）　聾瞽指歸を改訂して三敎指歸となす

同十七年（二十五歳）　阿波大瀧寺建つ、爲めに佛像を刻んで安置し歸路智泉を

伴ふて上る

同廿二年（三十歳）　大日經を久米寺に感得す

同廿三年（三十一歳）　五月入唐の敕許を得六月難波を發し十二月長安に入る

同廿四年（三十二歳）　惠果和尙の門に入り兩部の大法を受く

大同元年（三十三歳）　十月博多に着津し觀音寺に住む

同二　年（三十四歳）　入京して新帝に謁し優諚を拜し槇尾寺に入る

同四　年（三十六歳）　高雄に移る、叡山に登り刺を傳敎大師に通ず

弘仁元年（三十七歳）　春淸涼殿にて宗論あり現身卽證を示す、九月寶祈安泰を東寺に修す

同二　年（三十八歳）　帝と共に神道の灌頂を受く

同四　年(三十九歳)　傳敎大師高雄に來りて灌頂を受く
同七　年(四十二歳)　高野の靈峰を得る
同十　年(四十六歳)　南都北嶺の宗論起る、東北に巡錫す
同十一年(四十七歳)　二荒を日光と改む、秋大法師位、內供奉十禪師に補せらる
同十二年(四十八歳)　讃岐國滿濃池の別當となる
同十三年(四十九歳)　平城天皇に三味那戒を授く、高岳親王門下に入りて出家し給ふ、傳敎大師入寂す
同十四年(五十歳)　永く東寺を賜ひ、敎王護國寺と號せらる
天長元年(五十一歳)　雨を神泉苑に祈る、少僧都に補せらる
同二　年(五十二歳)　智泉人滅す
同五　年(五十五歳)　如意尼の爲め六甲山に錫を扛ぐ、多綜藝種智院を建つ
同七　年(五十七歳)　十住心論十卷を獻ず
同八　年(五十八歳)　再び六甲山に上り如意尼を落飾せしむ
同九　年(五十九歳)　高野に入り穀味を斷ちて禪定に入る
承和元年(六十一歳)　後七日の法會を修す、諸弟を誡めて遺誡の文をつくる
同二　年(六十二歳)　後七日の法會を宮中に修す、三月二十一日入定す
天安元年(滅後十二年)　文德天皇より大僧正を贈らる
貞觀六年(滅後廿九年)　清和天皇より法印大和尙位を贈らる
延喜二十一年(滅後八十六年)　醍醐天皇より弘法大師と諡號を賜ふ

略年譜終

空海が心の内に咲く花は

彌陀よりほかに知る人はなし

佛教傳說叢書弘法大師

弘法大師 目次

第壹回……神童の譽……一頁
第貳回……墨染の姿……一二頁
第參回……不二經の求め……二三頁
第四回……入唐の勅許……三五頁
第五回……密教の附屬……四七頁
第六回……波切不動……六一頁
第七回……活動の第一歩……七一頁
第八回……兩部神道並座主の訪れ……八五頁

露光量違いの為重複撮影

佛教傳說叢書弘法大師

弘法大師目次

第九回……高野の開基……九九頁
第十回……行脚化益……一一二頁
第十一回……神泉苑の祈雨……一二五頁
第十二回……智泉の終焉……一三七頁
第十三回……慈尊院の主……一五二頁
第十四回……女御の發心……一六六頁
第十五回……現身入定……一七八頁

弘法大師

（佛教傳說叢書第九卷）

大富秀賢著

第壹回　神童の譽

延暦元年九月の初めであつた。空は朝から晴れ渡つて氣色のよい秋日和、うすら寒い風は却つて氣を清々させた。海邊から岳へは點々として宛然畫いたやうな村落續き、田圃は一面に色づいて稻は撓伏し、畔の榛の木や楢林には百舌鳥や鵙が氣立しく啼いて、色鳥の群が何所からともなく押し出して來ては散つて行く、森の梢は襌色になりかけて閑ならんとする秋の氣配を示して居る。

露光量違いの為重複撮影

佛教傳說叢書弘法大師

第九回……高野の開基……九九頁
第十回……行脚化益……一一二頁
第十一回……神泉苑の祈雨……一二五頁
第十二回……智泉の終焉……一三七頁
第十三回……慈尊院の主……一五二頁
第十四回……女御の發心……一六六頁
第十五回……現身入定……一七八頁

弘法大師目次終

弘法大師

（佛教傳說叢書第九卷）

大富秀賢著

第壹回　神童の譽

延暦元年九月の初めであつた。空は朝から晴れ渡つて氣色のよい秋日和、うすら寒い風は却つて氣を清々させた。海邊から岳へは點々として宛然畫いたやうな村落續き、田圃は一面に色づいて稻は撓伏し、畔の榛の木や楢林には百舌鳥や鶫が氣立しく啼いて、色鳥の群が何所からともなく押し出して來ては散つて行く、森の梢は禪色になりかけて閑ならんとする秋の氣配を示して居る。

秋景色

此處は讃州屏風浦である、朝から螺の音が紺碧の空に響いて尋常ならぬ警報つゞく、農夫は誰れも彼れも野に出て働く季節であるけれど今日は朝から廣い田圃に一人として其影を認めぬ。今し方巳の刻が報ぜらるゝと里長がいかめしい衣紋作つて村端へ出た、これに續いて老若男女あれ後れじと路の兩側に並んだ。

やがて警蹕の聲が日に照る森の彼方に響き初めた。

『そらッ敕使様の御出！』

里長始め村人一同は忽ち地に平伏しになつた。この敕使と稱するは問民苦使と云つて一年に一回づゝ敕命を受けて諸國の政治狀態を視察する役で、威儀堂々到る所非常な尊敬を拂はれたものである。殊に今日屏風浦へ下向になつた問民苦使は何某の朝臣とて堂上の公卿衆の中でも腕利きの一人で、數ある雜仕を召し具して栗毛の馬に悠然と誇がり威風凛々として犯すべからざる大宮人であつた。

村端へ入ると警蹕の聲は一層嚴しく響き、村人の土下座せる前を靜々と縫ひ行かゝる中フト上使の眼に入つた一人の童兒があつた、年は八つか九つ、總角結いたる愛くろしい稚兒で其容貌が尋常一樣でない、額の廣い眉の濃い、眼色の深沈なる、口元の豊腴と引き締つて、其容姿の凛々しさ、巳づと怜悧の質をあらはし、何所となく偉人の相好を具へて居る。

公卿はヒラリと馬から下り件の童兒を笏にて打ち招き、

『稚兒の名は何と申すぞ？』

『眞魚と申し侍る』

『何歳になるぞ？』

『九歳にて侍る』

『何某の伜ぞ？』

『佐伯直田公の子にて侍る』

『鄙には珍らかな賢しい子ぞ、行末は學業を勵み天晴天下に名をあげよ』

御敕使樣と云へば里長始め村人一同が其勢位に怖ぢて丁つてヲヂ〳〵して居るにも拘らず、この稚兒は何氣なき体で問はるゝまゝ水の流るゝやうに爽やかに一々應答した、公卿はさも名殘り惜しげに幾度か稚兒を見返りつゝ元の如く馬上に跨つた。

平生から神童と云ふ評判の高い眞魚が、今日計らずも敕使がわざ〳〵馬から下りて賢しい子よ、悌な稚兒よとあらん限りの讃辭を盡されたのを現在目の前で見た村人が眞魚に對する畏敬の念は一入切なるものがあつた。

この稚兒こそ卽ち後年の弘法大師で後ち入唐して密教を齎し歸りて高野の靈峰を開き、雄風堂々上下を壓倒した傑僧である。

惟ふに佛教のわが國に傳はつた當時は屢々災厄に遭ふて眞に孤燈明滅たる有樣であつた、けれど聖德太子が憲法を制定せらるゝと共にその基礎漸く確立し聖武天皇の朝に至つては隆盛の頂點であつた。然るに弓削の道鏡が時の君寵を恃み、大政大臣禪師に任ぜられ尋いで法王となり、其邸を法王宮と唱するに至つて緇徒漸くこれに見做ひ、紫衣錦袍を身に纏ひ、威風堂々出入を飾るを以て

名譽とし理想として居つた。されば濟世救民の眞筌は全く沒却せられ、甚しきに至つて官女と誼を通じ、艶聞を流すにさへ至り、正に夕陽の西山に沒せむとするの觀を呈するに至つた。

この、墮落を救ひ倒壞を未然に防がんとするには、必ず偉人傑士の出づるを待つは必然の勢ひである。この要求に應じて出現せられたのが卽ち弘法、傳敎の兩大師で堂々と新佛敎の旗幟を張り以て敎界の面目を一新せられたのである。

且つ從來の佛敎は多く支那佛敎の直譯的であつたから、之れを咀嚼するには頗る困難をきはめたが大師の輸入せられた密敎は決して直譯的ではなかつた。元來漢土に於ける眞言宗は至極粗雜なもので十住心の判釋でも、顯密二敎の區別でも茫漠たるものであつた。然るに大師は明透なる頭腦を以て的確なる判決

を下し、此に粗雜なる密敎も完全なる一宗として成立せられた。云はゞ眞言宗は第八祖の大師に至りて初めて完成せられたのである。それのみならず大師は兩部神道說を唱導し、鎭護國家に重きを置き密敎をしてわが大和民族の性情に順應せしめられたのは千古の卓見である。後來親鸞、日蓮等が日本的佛敎を創唱したのも遠く大師の思想に胚胎して居ることを忘れてはならぬ。

そも〳〵大師は讃岐國多度郡屛風浦に呱々の聲をあげ、父は景行天皇の皇子稻背入彥尊八世の後胤、佐伯直田公、母は阿刀氏名を玉倚と云つた。この佐伯氏には仁德天皇の御代から讃岐國を賜り世々この國の司であつたが、今は昔の俤はなく逆境の深淵に陷つては居るけれどそれでも地方の名族として里人の間には羽振の利いた一家であつた。玉倚の方は一夜天竺より聖僧來り給ひて懷

影撮複重為の違い量光露

ろに入ると夢みて不思議に感じ、翌朝良人田公に語らるゝとこれ亦同じ靈夢を感じたとて兩人は奇異に思ふて居つたが、果して玉倚の方はその月から只ならぬ身となり、十月も過ぎ十二ヶ月を經た寶龜五年六月十五日誕生せられたのが大師である。この時瑞雲靉靆として產室を覆ひ、金色の光明は赫として屋内に滿ちた、これぞ大師が應化の舞臺に現はるゝ最初の背景であつた。

釋尊の出世

大師非凡の相

往昔、大聖釋尊が出世し給ふや母胎を出でゝ七歩を行じ、天上天下唯我獨尊と宣ひ、而かも自然に佛の相好を具へられたとある、今大師も生れ乍らにしてその相好凡人と異り、何所となく端嚴にして崇嵩なる瑞相を具へて居られた、されば兩親は曩の靈夢と云ひ、この異なる相と云ひ必ず凡人にてはあるまじと襁褓のうちから異樣に感じて居つた。

大師幼時の遊戯

大師が二つ三つの凡心のつくやうになつてから、その聰いことは驚くばかりで、且つ假初の遊びにも木切竹屑を集めて童堂を建て、土にて佛像を捏ねてこれに安置し、花を立てゝ禮拜し、そして諸經や行道の眞似ごとに戯るなど、凡て遊戯のはしくまでが殆んど世の兒童と異つて居つた、二歳の時であつた當時唐僧法進なる者が屏風浦へ來て大師の泣き聲を隣家にて聞き、こは尋常の泣聲に非ずして陀羅尼を讀む聲なりとて、翌日わざ〳〵大師を訪ねて合掌したと云ふ。斯く凡ての行爲を案ずるに一として凡者のすべき眞似方ではない、兩親は漸く畏敬の念生じ來り大師を呼んで貴物と字するやうになつた。

唐僧の驚き

六歳の時である、毎夜八葉の蓮華に座して十方の諸佛菩薩と過去未來を物語りする靈夢を感じてから、子供心にも菩提の道に發心し、七歳の春には深

露光量違いの為重複撮影

ろに入るを夢みて不思議に感じ、翌朝良人田公に語らるゝとこれ亦同じ靈夢を感じたとて兩人は奇異に思ふて居つたが、果して玉倚の方はその月から只ならぬ身となり、十月も過ぎ十二ケ月を經た實龜五年六月十五日誕生せられたのが大師である。この時瑞雲靈靄として產室を覆ひ、金色の光明は赫として屋内に滿ちた、これぞ大師が應化の舞臺に現はるゝ最初の背景であつた。

釋尊の出世

大師非凡の相

往昔、大聖釋尊が出世し給ふや母胎を出でゝ七歩を行じ、天上天下唯我獨尊と宣ひ、而かも自然に佛の相好を具へられたとある、今大師も生れ乍らにしてその相好凡人と異り、何所となく端嚴にして崇嵩なる瑞相を具へて居られた、されば兩親は屢の靈夢と云ひ、この異な相と云ひ必ず凡人にてはあるまじと襁褓のうちから異樣に感じて居つた。

大師が二つ三つの人心のつくやうになつてから、その聰いことは驚くばかりで、且つ假初の遊びにも木切竹屑を集めて童堂を建て、土にて佛像を捏ねてこれに安置し、花を立てゝ禮拜し、そして讀經や行道の眞似ごとに戲るなど、凡て遊戲のはし〴〵までが殆んど世の兒童と異つて居つた。二歳の時であつた當時唐僧法進なる者が屏風浦へ來て大師の泣き聲を隣家にて聞き、こは尋常の泣聲に非ずして陀羅尼を讀む聲なりとて、翌日わざ〳〵大師を訪ねて合掌したと云ふ。斯く凡ての行爲を案ずるに一として凡者のすべき眞似方ではない、兩親は漸く畏敬の念生じ來り大師を呼んで貴物と字するやうになつた。

大師幼時の遊戲

唐僧の驚き

六歳の時である、毎夜八葉の蓮華に座して十方の諸佛菩薩と過去未來を物語りする靈夢を感じてから、子供心にも菩提の道に發心し、七歳の春には深

夜單身忍び出でゝ、捨身の行を修せんとて、倭斯濃山に登り磊々たる嵓角に立ちて廣く三寶に誓ふやう

『われ、今生の中に出家して沙門となり、普く一切の衆生を化導し申さんとの願心あり、されど斯かる邊陬にありては自然願望も成じがたかるべしと思へど、若しわが一念徹りてこの願望成就すべくんば如來は尊容を示現し給へ、若し今生にて未だその期到らずとならば、わが一命は衆生に代りて諸佛に捧げ申し、次生又人界に生れ出でゝこの願遂げ申すべし』

ヒラリと身をかはして白雲迷ふ千仞の谿底へ飛び込んだ、この時天人忽ち降りて金色の蓮臺を以て大●●師の身を捧げた、夢か、あらず、幻か、あらず、夢にあらず幻にあらず、奇雲溶々として四邊を覆へば釋尊の靈容は諸天善神に圍繞せられ百福の蓮臺に座して出現し給ひ光明赧として闇を照した、大●●師は思はず大地に平伏し歡喜の涙に咽びつゝ、この誓願を起しつる上は一身を法の爲めに捧げ申すべしと且つは拜し且つは誓ひつゝ下山した。爾來この山を捨身が岳ともいひ釋迦ケ嶽とも稱するやうになつた。曾つて西行法師のこの地を過ぎて

めぐりあはんことのちぎりぞたのもしき
　きびしきやまにちかひみるかな

と詠じて大●●師の往昔を偲ばれた。

斯に大●●師は沙門となり身命を濟世利民に委せんと固く決心するところがあつた。爾來その根帶をつくるに努め、遂に十有五にして父母の膝下を辭し、蹶然起つて上京の途についた。

名利千金易レ撫テ髯ヲ
慈悲ノ一錢難シ離レ爪ヲ
—弘法大師—

第二回　墨染の姿

光仁天皇の第一の皇子卽位し給ひ、これを桓武天皇と申し奉つた。天皇は寧樂の地が帝都として狹隘なるを慨かせられ、他に萬世不朽の王城を構へんと思召し、延暦三年敕使を山城の長岡につかはして地を相し、宮殿を築かせられその年成つて都を遷し給ふた。世に長岡の京と申すがこれである。されば百貨の

延暦の遷都

阿刀大足

文物がこの新京を中心として盡く集注したのみならず凡そ世に名を得んとする者、利に贏たんとする者、事を成さんとする者は百川の海に注ぐが如くこの中心点に集つた。大師亦南海の邊陬にありて事を爲すの不可なるを知り久しく京幾の空を翅望して居られたが兩親は容易にこの掌中の珠を放さうとは云はれぬ

斯に大師の母方の伯父にして伊豫親王の學士である阿刀宿禰大足と云ふ博學な人がある、この人は平素から大師の筆道の力と云ひ、文章の才と云ひ凡庸でないと感じて居られたが、今茲は大師も十五に達したと云ふので、あたら鄙に埋めて置くのも惜しいもの都に上ぼせては如何であると音信のある毎に佐伯氏へ申込んで來る、その音信を聞く毎に大師は血湧き肉躍る思ひがして、青雲の志轉た抑へ難きものがあつた。

『喃、父上、母上、吾今受け難き人身を受け、値ひ難き佛法に値ふ、この喜び何に喩へ申さん、凡そ生あれば必ず滅せざるはなし、如何に別れを惜むとも息絶へぬれば直ちに野邊に送るなり、吾今父母の御許にあり朝夕の禮をいたし、水菽の業をつとむとも、只假の世の行ひにて眞實報恩の孝にあらず、眼前須臾の別離を悲みては未來永日の悲歎を招くなりイザ暇賜るべし』

理の籠つてある大師●●の請ひに兩親も合點し、眼前須臾の恩愛に引かされてムゲに留むべきでないと解つたので、此に始めて大師●●の志望が許された。鬱敎たる英氣に滿ちた大師●●は欣然として父母の膝下を辭して屏風浦を解纜した。これ大師●●が十五を迎へられてまだ間もない延曆七年の晩春であつた。

今でこそ交通が便利になつて百里の道程も數刻にして達することが出來るけれども今から千二百年も前のことであるから、海陸往來の不便は實に吾人の想像以上にあつたに違ひない、殊に大師●●は初旅で而も單獨旅行であるから仲々苦しかつたであらう、けれど滿身が青雲の志氣で張り切つて居る大師●●は寧ろ心膽を練り活力を增進する機に觸るゝを喜びつゝ、日ならずして新京に着かれた。

大足太夫はこの新來の客を歡んで迎へ、斯くて十八歲までは伯父と岩淵勤操僧正の許で內外の兩典を究められた。この勤操僧正は靑龍寺の惠果和尙と共に●●大師とも最緣故の深い恩師で、十二歲の時に大安寺の信靈に就て得度し、後善議和尙に師事して三論宗の奧義を究め、胸には勝義皆空の理水を貯へ、口には八不中道の智劍を振ひたれば、當時世人からは明星の化身さまで激賞された程の大德である。然るにこの勤操僧正が大足の紹介で大師●●の姿を一瞥するや忽ち

大師大學に入る

その非凡の相貌に敬畏の念を生じ、五大虚空藏、能滿虚空藏の法を授けた、この法は大安寺の道慈律師が入唐して受法し來り、これを善議大德に傳へ、善議大德はこれを勤操和尚に傳へた、和尚がこの秘傳を忽ち初參の大師●●に授けられたは如何に大師●●に囑目して居つたかと云ふことが知れる。この時はまだ大師●●は染衣の身ではなく、一介の少年學生に過ぎなかつた、けれど大師●●は熱心にこの法を信じ行じて居つた。

十八歲から大學に遊び直講味酒淨成に毛詩左傳尙書を、岡田博士に左氏春秋を問ひ、刻苦勵精したれば天稟の頴才は宛然駿馬に鞭つて坦々たる平道を馳驅するやうに發達した、大學に在ること久しからざるもあらゆる經史を博覽しその堂奥に達した、されど儒敎の思想は高遠な大師の志望を滿足さすことは不可能であつた、此に於て鹽瞽指歸三卷を著し孔老二敎が單に上古の俗敎にして其敎ゆる所淺薄で來世に益なく、佛敎の原理が如何に幽玄にして福利あるかを論證し、所謂三敎の比較を行ふて指歸する所を說き、飄然大學を去つて勤操僧正の門を叩いた。

鹽瞽指歸

大師出家の懇請

●●大師は僧正に對して俗敎の福利を求むるに足らぬことを縷々辯難し、玆に僧正の法弟として沙門たらんことを懇請した。けれど燃へ易ひ情熱は靑年の痛弊で、殊にまだ二十歲にも滿たぬ大師●●なれば天才非凡とは謂ひながらまだ〳〵稜角が除れぬ、尙ほ深く心身を鍛練し稜角が除れて、所謂圓熟の境に到らねば眞に沙門として　大事は遂げられぬ、されば僧正は幾度も大師●●の懇請を却けた、けれど盤石のやうに決心せられた大師●●は僧正の峻拒は耳へ這入らぬ、僧正も遂

にその道心が尋常でないことを看取し、法弟として容るゝことを諾した、さりながら燃へ易ひ熱情を冷し、鋭い稜角を消磨し心身の鍛練を行ひ圓熟の境に到らずば得度も許し難し、先づそれまでは近士として容すべしと言ひ渡された、近士と云ふは俗でありながら五戒を持つものゝことである、法號を無空と名づけられたのはこの時であつた。

近士無空は難行苦行の途に上らんとて僧正に暇を乞ひ大安寺を後にして出掛けたのは十九歳の春であつた。身を雲水にまかせた大師は行く〳〵山川を跋渉して心身を練り、道程に食を求めつゝ遙か海を渡りて阿波に着いた、この國には大瀧嶽と云ふ靈山がある、山容巍然として高く雲表に秀いで、修禪の爲めには最も勝區である。大師は先づこの危峰を踏み破り炎威骨を鑠すやうな中に、

一心不亂に虚空藏の法を修したれば忽ち悉地の相現れ、天からは寶劒飛來し瑜伽の壇上に立つた。この寶劒今に大瀧寺に寶物として存して居ると云ふ。

大師は更に阿波を去つて土佐に移り室戸岬に姿を現した。室戸岬は又最御岬とも稱して安藝郡にあり、滄范たる太洋は其三面を包み海に臨んで兀立せば怒濤岩際に碎け、白浪天を衝くの光景は壯絶又悽愴、修禪の地としては又大瀧嶽に讓らぬ好適の地である。大師はこの絶壁の巖頭に兀坐し、晴雨を厭はず日夜を別たず、虚空藏求聞持の法を修せば滄海連つて法性無邊を示し、隨緣眞如の波立たぬ日もなかつたと云ふ。大師は思はずも口すさみ

法性の室戸といへどわがすめば
うねの浪風立たぬ日ぞなき

と詠ぜられた。然るにこの修法を妨げんとて、毎夜海中から異容の惡魔現はれて、地軸も折れよとばかりの大音響を發したり、或は怖しい鬼女と現はれて大●師の神思を妨げんとした、けれど泰然自若たる大●師は更に意に介せず、靜かに求聞持の法を勤念して變はる所がなかつた。

一夜萬籟閒として響を收め、海水亦眠りに就き天地寂然たる時、大●師は靜かに草庵を出でゝ臨海の岩角に立ち求聞持の神呪を唱すれば、空中より明晃々たる曉星飛び來りて口中へ入り、瑞雲鬱鬱して異香四方に芳薫し、虛空藏菩薩は靈容を現じて赫々たる光明を放ちて大●師の頂を照し玉へば、忽ち心腑ひらけ求聞持の悉地を成就せられた。

大●師は四國を去つて嚴島に渡り、更に安藝に入り吉備を過ぎ播州に歩を向けた、行く〳〵行乞しつゝ一夕或旅宿に入つた、時に一人の老媼出で來り鐵鉢に飯を盛つていたく大●師を供養し自らその由緒を述べて云ふやうには、

『妾は元行基菩薩の御弟子の僧がまだ優波塞にてある時の妻女にて待るが、その僧となりし良人の遺言に、わが入滅の後某の日にこの里へ菩薩來り玉ひて汝の家に宿し玉ふべし、必ず慇懃に饗應すべしとありけるが、今霄は丁度亡き良人の遺言せし日に相當するなり、これぞ尋常の行乞僧にましまさず、菩薩の尊來なり、斯かる尊き方に値ひ奉るはこよなき喜びに候』

老媼の隨喜は一方でない、大●師はこの未來記然たる供養を納受し、翌朝出立に臨んで老媼の爲めに天●地●合の三字を柱に書かれたらその文字は深く染み込んで永く殘存してあつたと云ふ。

斯く大●●師は殆んど二ケ年に渉りてあらゆる辛慘を嘗めて心身を練り、情熱を抑へ稜角を除るに努め瓢然再び大安寺へ歸つた。

勤操僧正は大●●師を迎へ巨細に其動靜を視察するに、昔日の大●●師とは大にその趣きを異にし、稜角は消除せられ、不屈の精神はいよ〳〵鍛はれ、而かも心身頗る堅固である、正に僧正の理想が實現して來たのである、これなら他日沙門として大事を爲すに足ると看取し、いたく修行の空しからざるを賞し和泉の槇尾寺へ伴ひ、髻髮を剃除して出家得度し、沙彌の十戒七十二威儀を授けられ、名を敎海と命せられ、後に如空と改めた。

これ延曆十二年癸酉の秋で正に大師が二十歳の時であつた。

第三回　不二經の求め

此日已ニ過ヌ
如シ小水魚ノ
一

寂みしい大安寺の金堂で今日此頃毎日〳〵時を定めて佛前に祈りする若い沙門がある。金堂へ入るとまめ〳〵しく佛華をさゝげ燈を点し、一抹の香を薫じ憂々と念珠を爪繰るかと思へば、やがて誦經の聲が高からず低からず聞くさへいと殊勝氣である。沙門は經を誦し了ると又靜かに一灶の香を焚き瞑目合掌して

命　即チ滅　少ス
斯ニ有ンヤ何　樂カ
一

『南無釋迦牟尼世尊、前生の宿緣淺からずして佛弟子となり菩提を求め四衆を

出曜經一

化すべき身にしあれど、三乘十二部經にては末だ佛意はかり難し、斯に不二の法を求めんとす、願くは南無本尊如來、南無觀世音大勢至菩薩、三世十方の諸佛如來、われに加護を垂れ玉ひこの願望成就せさせ玉へ』

この沙門こそ三乘十二部經に疑義を生じ、進んで不二の法門を求めんと祈願をこめて居る大師である。これより先大師は二十二歲の春東大寺に入つて具足戒を受け此に完たき一個の沙門となり、法名を空海と改めた。二十歲を超へたばかりの若僧であつたけれど既に南都の佛敎界では龍象と稱せられ重鎭と仰がれて居た。けれど此等の聲譽を大師は耳朶にも觸れさそうとはせぬ。只朝夕志す所は生死解脫の大道、釋尊の眞意、佛敎の眞諦を求めんとする念慮より他にはない。此に於て大師は大安寺の本尊に一百日の祈願を凝らしその靈示を仰がんとて毎日時を決めて參籠せらるゝのであつた。

彼の親鸞聖人が丁度この轍を履んで居らるゝ、聖人は九才の時に出家して沙門となり爾來二十年間北嶺に於て研鑽を積み、學は顯密大小を兼ね頗る出藍の譽れあり、まだ而立にも達せぬに夙く聖光院門跡の榮職に就き、その聲望殆んど一山を壓倒し、やがては北嶺の坐主たるべしと噂取り〴〵であつた。けれど聖人の目には權勢も名利も弊履の如く一顧の價値もない、只身沙門となりし本意を失はず、生死得脫の道を躰得せんとするに汲々とせられたが容易にその眞諦を攫得することが出來ぬ。聖人はこの煩悶を述べて

『定水を凝すと　雖識浪頻りに動き、心月を觀ずと　雖妄雲なほ覆ふ』

と歎せられてある。

聖人の煩悶は日に月に加り殆んど昏迷惱亂して自ら爲すべきを知らぬまで悲歎の淵に沈んで居られたが、其結果觀音の靈告を得て苦悶を救はんとて六角堂へ百日の祈願を立てられた。丁度二十八歳の十二月三日から翌年三月三十一日まで一夜も欠くる所なく雨に濡れ雪に襲はれ三里の道を運ばれた。この參籠が滿ずる五更の孤枕に奇しき觀音の靈夢を感じ玉ひ、此に一山の聲望と門跡の顯職を抛ち、一鉢一囊の身となり吉水の禪室に源空上人を訪ねられた。これ建仁元年の春で正に聖人が二十九歳の時であつた。高僧が法の眞諦を得んとするに汲々として期せずしてその徑路を一にするは恰かも符節を合するやうである。

●●大師百日の祈願もいよ〳〵今日が結願である。●●大師は時を違へず金堂に現れ

佛華を獻げ燈を點じ一抹の香を薰じて祈願をこめた、一縷の香煙は綾く立ち上り淡く空に消へて行く、●●大師は瞑目合掌して何等かの靈感を待つた、けれどまだ佛意に叶はぬのか、感應がない、●●大師は更に瞑目合掌して祈願を凝らし『若し靈示を得ずんばわが所求の徹底するまでこの金剛座を動じ申さず』且つは念じ、且つは誓ひ瞑目合掌すること多時……

不思議！　不思議!!　不思議!!!

忽ち大師の耳に觸るゝ微妙のひゞきがある。

『切なる汝が志をあはれみわれ今汝に告ぐ、大毘盧遮那神變加持經こそ汝が求むる所の不二の妙經なり』

默想裏に神心を凝らして居つた大師は愕然として視回した、けれど四隣寂とし

て人なく只明滅たる灯光と立ちのぼる淡き香煙のみである、大師●●は更に瞑目して靈感を繰り返した。

『大毘盧遮那神變加持經こそ不二の經典なり』

聲は細かつたが寂然たる堂内にはこの獨語は強く響いた。やがて大師●●の顔色は莞爾として解け、法衣の衣紋を直し端然と座し、高く本尊を見上げつゝ三拜九拜せられた、此に大師●●は百日の參籠空しからず神秘の靈告を得たるを欣んで本尊前を拜辭した。

大師●●はこれまでに自分の懷疑を解決しようと思つてあらゆる經疏を讀破したけれど今靈告を受けたやうな經典は更に見當らなんだ。それが單に經題のみの靈告で果してその經典が何地にあるや否やは疑問である、それから大師●●は毎日經藏へ入つてあれよこれよと探求するのに餘念なかつた、而し經名さへ見當らぬ。

此に於て大師●●は少からず迷ふた、石淵の金堂で耳に響いた經名は一時疲勞した心身作用の妄想に過ぎなかつたのではあるまいか、瞑目の裡にマドロんでその機に夢みたのではあるまいか、大師は殆んど霧中に彷徨する感があつた。この煩悶を幾度か繰り返した後最後の鐵案が下された、蓮の莖の糸を以て八萬由旬の須彌山を掻き上ぐるとも佛語に虛妄あるべからずと、大師●●の所信は此に確立し身命を賭して斯經の發見に努めた。

爾來、三十歳までの八年間はこの探求の爲めに錫を東西に飛し更に席の煖まる暇はなかつた。かの十大弟子の隨一である族甥智泉の出家と、曩に筐底に秘

大龍寺の造營

大師大龍山に留る

してあつた聾瞽指歸を訂正して三敎指歸と改題せられたのはこの期間であつた

阿波大龍寺の造營は延曆十七年五月で、丁度三敎指歸を訂正せられた翌年に相當して居る。世にはこの造營は全く桓武天皇が●●に歸依し玉ふ餘りその敕願所として建立せられたものぢやと論ずる人もあるやうであるが●●が今日までの法臈としてはまだそれまでの地位には達して居られぬ、只この地が南海の一勝地として救願に應じて建立せられたものであらうと思はる。

この建立には阿波國司藤原朝臣文山が綸旨を承け日ならずして雲表に亢立する堂塔が出來上がつた。元より●●とは賓緣淺からぬ修禪地であるから一は聖恩の無窮を祈る爲め、一は多生の宿緣ありて沙門となりたる佛恩に酬ひん爲めに諸佛如來の尊影を彫刻してこの山上山下の五ケ所の伽藍に安置し、この開眼

供養の爲めに堂側に草庵を結び朝夕誦經に餘念なかつた。

この供養を終つた●●はその歸路兩親を省し、再び身を斗藪の沙門に窶し海を渡りて和泉の室生寺に姿を現した。この寺で端なくも造次顚沛念頭に往來してあつた不二經が大和の久米寺にあることを聞知した。●●はもう矢も楯もあてられずそのまゝ久米寺へ急いだ。

唯久米寺のみ聞いた大師はその何れに藏せられてあるかに少からず苦心したが、經筐の底をたゝいて求めたけれど更に見當らぬ。此に於て●●は又佛前に跌座し一心に凝念し

『われこの願を成せざればこの座を去らず』

●●は全く身命を佛陀に捧げ晝夜退轉なく金剛座に跌座し、眼に色を見ず口に

飲食を絶ち只管その所在を知らんことを努めた。

『沙門よ、汝が求むる經は東塔の柱下にあり矣』

これが大師の耳に觸れた微かな響きであつた。大師は愕然と目を開き、この微妙の靈告を心に繰り返し欣然として合掌禮拜し讀經した、その聲は細いが力があつて闇を破り金堂に響いた。

翌朝、大師は靈告に基き東塔の柱心を求めた。

在り矣、在り矣、大毘盧遮那經一部七卷!!!

大師が夢寐にも忘るゝことの出來なかつた多年の願望は正に成就した、大師の歡び如何ばかりぞ。大師は幾度かこれを押し頂き恭しく案上に置き靜かに繙いて讀み下した。宗學の素養は餘りあり、何れの經典を讀下しても能くその眞

筌を攫むことが出來るけれど、この大日經はその經意甚深にして眞諦を得ること殆んど難く、疑義は徒らに紙背に充つるのみである。大師は此に少からず落膽した。そはこの濛雲を晴らして吳れる師は南都北嶺何れにもないからである

此に於て大師の入唐求法の念は勃然として禁ずることの出來ぬやうになつた。

この大日經と云ふは聖武天皇の神龜五年に唐僧善無畏三藏が齎し來て、初め東大寺に留錫して密敎の弘通に努めたが時機未だ熟せぬ爲め、久米寺を建立し一部七卷の大日經を塔下に藏し、三種の佛舍利を寶塔に收め、譯文を殘して曰く、

馱都はこれ釋尊の遺身、經王はまた遮那の全體なり、然れども小國片域大機熟せず、よりてこの法をこの地に留め、まさに人を待ち時を期する所なり。

來葉には必ず弘法利生の菩薩あり、來つてこの趣を世に弘むべし

而して三藏は去つて唐土に歸つた。大●師が十年の宿志として東奔西走あらゆる辛酸を嘗めて探求せられた不二經は斯くして大師の手に歸した。三藏の期待した弘法利生の菩薩は卽ち餘人ならずして實に弘法大師であつた。

けれど大日經は所謂密敎所依の經典で顯敎とは全くその趣を異にして居るから、その眞筌を得んとすれば面授口訣を得るにあらざれば解すことの出來ぬ聖典である。此に於て大●師は入唐の志望頻りに萌して來た。

一切有無の法は　夢幻泡影の如し
露の如く亦電の如し　まさに是の如きの觀を作すべし　—金剛經—
夢の世にまぼろしの身の生れ來て
つゆに宿かるよいのいなづま　—古　人—

第四回　入唐の勅許

延曆二十二年四月十四日、遣唐大使參議左大辨兼越前守從四位上藤原朝臣賀能、副使從五位上石川朝臣道益等の一行が難波から船を艤し任に趣いたが程なく暴風に遭ひ船はさん〴〵に破損し、殊に一行中の豐村家雄等は溺死するの不幸に陷つたので詮方なく一旦引き返した。爾來船の修覆に取りかゝり翌年に至つて全く出來上つたのでその四月二十三日に主上には一行の重立つた者を召し給ひ別宴を賜ひ節刀を授けられ、いよ〳〵不日渡航することに決まつた。

●●大師は久米寺に於て大日經を發見し爾來一心不亂に耽讀せらゝるけれども、經意幽遠にして會通することが出來ぬ、如何に大●師の博學を以てしても佛の密

意を捕捉することが出來ない。然るに當時支那に於ては所謂密敎の精粹時代であつた、大師が入唐求法の志望が勃然として禁ずることの出來ぬのも最もである。然るに去年空しく引き返した遣唐使の一行が不日再任することを聞いた大師は何としてゞもこの一行に加はりて入唐出來得るやう敕許を蒙らんことを企てた。けれど大師はまだ而立を超へたばかりで、殊に綱位もない渺たる一沙門に過ぎなかつた。されば敕許を得ると云ふことは仲々容易ならざる問題である大師はこの問題の爲めに少からず憂悶したがよい妙案も浮んで來ぬ。

詮方盡きて大師は恩師勤操大德を訪れて敕許の問題を圖つた、寢耳に水のやうな大師の志望を聞いて大德も尠からず驚いた。啻に驚くばかりでなくその行を大に危んだのであつたし 大德は須臾瞑目のまゝ無言であつた。大師は再び口

を開き、

『空海は三乘十二部經に疑義を生じ、爾來十餘年の間苦辛慘憺して不二の妙典を求めしに、圖らずも去年大毘盧遮那經を得たれば佛陀の冥祐を拜謝して、これを繙讀候も衆情滯碍して通せず、岐疑紙背に滿ちて秘鑰を解くことを得ざれば、大唐に渡りその秘を究めばやと存ずる次第なれば、わが師の御手に據りて敕許を得たく、この儀よろしく御聞き入れ下さるやう』

大師は恭しく述べ了りて師の顏を見上げた。大德は聞き了りてパチリ眼を見張つた。

『入唐求法の志望もいと殊勝なれども、まだ年も若ければ今暫し時機を待つて渡海しては如何にや』

然り日本の沙門として海外に出で求法するには地位もひくければまだ年も若い大德は何としてゝもこの志望を翻さそうとして居る、これは強ちこの企てに不滿を抱いて妨げようとするのではない、却つてその温情から出た婆心である、何となれば當時日本から留學する沙門としてはそれに相當する行裝が必要であるからである。殊に這回の大使一行には傳敎大師が堂々と加つて入唐することに決まつてある。傳敎大師は同じ大安寺の門下ではあるけれど、年齒十九にして入唐の敕許を受けて居るばかりでなく、皇太子からは求法の資に當つべしとて莫大の黃金さへ下賜せられ、身は內供奉十禪師の榮階を辱ふし、譯語として義眞を隨伴せしめ、其振旅實に堂々たるものであつた。

それに比すると大師は名もない一介の沙門、たとひ胸には多年濫蓄の學叢を有し、自在に漢語を操るとしても綱位も持たぬ雛僧、同じ大安寺の法類として もその懸隔が非常に相違する。且つ大師は彼地に留り日本の沙門として求法するだけの貯へがない、何れから眺めてもその可なる點がない、その行に大師を加へると云ふことは、洵とに至難の事である。

けれど、今燃へ立つやうに熱して居る大師は更にそんな徒事を考へて居る餘裕は一寸もない。

『空海が大毘盧遮那經を發得したるはこれ時機淳熟のしるしに候、三藏の遺記せられし弘法利生の器にはなけれど、あたらこの妙典を手にしながら、面授の師なき爲め筐底に藏し紙魚に委せんも惜しきものに候、さればこの身命を

捧げて經の眞諦を體得したく候へば、扛げて執奏の勞を運ばさるゝやう…』

大德の腦裏は今や梭のやうに働いて居る、やがて師は拱いた手を膝に下ろし目は開かれた、●●師は師の返しや如何と堅唾呑んで控へて居る。

『ヨシ〳〵其所までの願望とあらば衲が身に代へて果さすべし』

勤操大德の斷乎たる決心はその眉宇の間にあらはれてあつた。●●師は幾度か拜謝して

『さては空海の願望を納受まし〳〵て果させて下さるかや、千萬忝く候』

大德は直に上奏文を認めた、曰く

右十四年戒壇に登るの僧空海、諸佛の指授を受け温ぬる所の紋大和國久米道場にあり、善無畏三藏の遊趾に得る、彼の三藏識して曰く、此地大機未だ熟せず經を止め時の來るを待つ。世に弘法利生の菩薩あり來つてこの經を恢云々、然るに空海諸佛の指授を受け古聖人の讖文に當る、今國家此靈異を產す、天下太平の豫標か、伏して乞ふ、陛下敕擢して法を求め、玄珠を異邦に攻しめ大厦の材を致さしめよ。

大德はこの上奏文を捧げて●●師の入唐求法の敕許を仰いだ。けれど●●師が無位の僧であると共に勤操大德までも綱位を拜せぬ無位の陰者であつた、大德は●●師の熱心にほだされて上奏したものゝ果して敕許あるや否やは大なる疑問である、危惧してみれば隨分覺束ないものである。爾來大德は心潛かに肝を煎つたこと一方でなかつた。

日ならずして治部省から大德の元へ急使があつた、開いてみれば五月十二日

治部省の急使

沙門空海を伴ふて參內すべき旨が嚴記されてある。大德は讀み了りて怡然として滿面笑みを湛へ恭しくその符を押し頂いた。大師は大德の急な招きで方丈へ來り大德へ禮した、大德は無言のまゝ省符を開いて讀み聞かせた、大師は驚倒せんばかりに悅ばれた。

大師入唐を勅許せらる

超へて五月十二日、大師は大德に導かれて入朝したれば親しく謁を賜ひ、入唐求法の勅許を拜した。この時大師の胸中果して如何、血湧き肉躍り骨も溶けんばかりであつたらう。いよ〳〵勅許を受けた大師は白檀で一刀三禮の藥師の尊像を彫刻し、且つ般若心經一百卷の手寫を急いだ、これは萬里の波濤を恙く渡り志願成就を祈らんが爲めであつた。この藥師は現今仁和寺の喜多院の本尊となつてあると云ふことであるが如何にや。この他大師は等身の自像をうつし

藥師の影刻

これを母公に送りて記念とした、これ大師が常に孝養の念厚く而かもこの行に對しては十分決心して居られたことが知れる。

一行の船

延曆二十三年六月一日、遣唐大使の船は難波の濱に艤せられた。大使、副使は去年の如く藤原厚賀能と石川道益、その他判官、錄事等何れも當時の才學俊秀より選ばれた人々のみである、一行の船は四隻から成つて、第一船には大使藤原賀能、副使石川道益、留學生橘逸勢である、大師はこの第一船に同乘した第二船は遣唐使判官菅原清公等で澄師は弟子義眞と共にこの船に同乘した。第三船は同判官三棟今嗣等、第四船は錄事と雜司とであつた。この行は所謂平安朝佛敎界の雙璧が座乘して居る、然し澄師はすでに不惑に達し而かも叡山の座主、鎭護國家の導師として威風堂々たるに反し大師は一介の平僧、彼はその行

壯んにして大是はその行微にして疎、その對照が頗る奇觀を呈して居る。

入唐せんとする者の宗族知己が各その行を壯んにして見送つて居るのは昔も今も人情にかはりはないけれど、大師●●を此地まで見送りに來たのは智泉のみであつた、大師●●は智泉に向ひ

『汝は余より總慧に似たれども身體病弱なり、壽を保つは一は法の寶ぞかし、余去るの後は一身の健康に心を寄せよ、されどそれが爲め修學を怠るは大なる罪なり、汝父母の膝下を辭して法の爲めに學ぶこと七年に垂んとす、余去るの後は更に怠らず登壇受戒し此に沙門たることを期せよ、これ父母に對する唯一の孝なりゆめ忘れなせそ……』

大師●●の慈誨は聲涙共に下り温情は言外に溢れた。智泉は只頭を下げたまゝ應へをするのみである。船は船頭の一令の下に洪洋たる洋上に浮み、やがて水夫の掛聲勇ましく激浪怒濤を破つて進んで行く。

見送り人の中で麻の法衣を着けたる一人の若い出家が、進んで行く船の姿を眺めつゝ頻りに泣いて居る。これぞ今茲十六を迎へたいぢらしい盛りの智泉で今までは大師●●一人を父とも母とも憑んで居つたに、今や生死さへ分らぬ異域に跼み入り淹留二十年を期せらるゝと聞き、今日の生別はやがて死別のやうに思ふて別離を悲むのであつた。

一行の船は内海の航路至つて平穩で日ならずして豐前に着いた。大師●●は宇佐八幡宮に詣で豫ねて手寫し置いた般若心經百卷を寶前に納め、以て海上の安全を祈つた。船は更に進んで肥前の田浦に着いた。七月六日當港を發しいよ〳〵

內海を離れて漂茫たる巨海に出た。

雲路遠山漸く粧ひを沒し、西を望めば愁烟肝を焦す、一の孤島だになく眼を遮るものは唯蒼々たる洪波のみ。船は滿帆に海風を孕ませていよ〳〵駛走し、四舷その序を亂さず海波を蹴つて漕ぎ往く光景は眞に壯絶である。

大使藤原賀能と留學生橘逸勢とは能く似た至極磊落な性で互ひに古今の人物を拉し來りてこれを評騰し、激して舌戰を交してみたり、或は管絃詩歌に耽り、果ては扇合せ繪合せに打ち興じ無聊を慰めて居つた。大師は晝夜三時の行法怠りなく、その他は聖典に眼を曝すに餘念なく、獨り船の駛るを知らざる體である。

水夫、揖取は歌の節面白く歌ひ乍ら櫓の調子を合せて漕いで居る、船は波を切つていよ〳〵進んで行く。

今は早や里近くこそなりにける
あまりに山の奥をたづれて

……弘法大師……

第五回　密教の附屬

船が田浦を發したその翌日であつた。戌の刻に至つて漂風俄かに起り驟雨はげしく洪波忽ちに激し船は將に覆沒せんとした。一行の驚きは一方でない、或は故郷に向ひて鷗鷺の盟ひ空しくなんことをなげき、或は巨海に沈みて魚鼈に腹を觸れんことを悲んだが、天の爲せる災は人力の如何ともすることは出來ぬ。

大師の祈念

●●大師は神佛の加護に賴りて天の怒りを靜めんとて、船首に座し遙か本土の空を伏し拜み、壹百八十七ケ所の天神地祇を祈念し、金剛般若を諷讀開講し、神毎に法施し奉るべき旨懇ろに誓約せられれば、鐘谷の感空しからず、水月の應忽ちにあらはれて翌八日に至り風凪ぎ波靜まつた。けれど航行を續けて居るのは第一第二のみで第三第四の兩船は全くその往く所を詳にせず、あはれその片影だに留めなかつた。

從來日本から遣唐使が入唐する時には三千里の航路を經て揚蘇州の津に着くのが前例になつて居る、然るにこの船は風波の都合で三千七百里の海上を經て第一船は八月十日福州に、第二船は九月一日明州の海岸に着船した。これが爲め一行は少からず迷惑を感じた。第二船にあつた澄師は實に大師●●に後るゝこと二十一日にして入唐し而も長安に入らずして直ちに天台山に登り、翌年五月大使と共に歸朝したから兩師は異域に於て一回も會見する機がなかつた。

州司疑つて船を封す

第一船の着いた福州の刺史抑晃は痼疾の爲め任職を辭し、十月三日間濟美と云ふが新刺史として赴任したから、大使は書を致し日本遣唐使として入唐せる旨記して來意を報じたけれど、州史は其意が充分通ぜなかつたのか一應披覽した上忽ち地に抛つて了つた。大使は三たび書を致して皇帝に報ぜらるべき旨を通じた、けれど州廳からは何の應へもない。惟ふに日本からの遣唐使は毎時も揚蘇州へ上陸するのが前例であるから、この漂着を眞物と思はず、商船などが漂流して來て僞りて報ずるのであらうと疑つて、遂には一行の船を封じ人々を濱沙に投じて、而かも嚴重な監視を附した。一行の齎して往つた米鹽は今や殆

んど渇きんとしその命脈は實に旦夕に逼つて來た、萬里の異域に於てこの虐待を受けた一行の遺恨は骨に徹したであろうと思はる。

一日、大使は大師に囑して云ふやう

『われ等、勅命を奉じて遙か異域に來るも譯語通せず、書を献ずること再三に及ぶも一回の應答なくしてこの虐遇に會ふ、今やわれ等の進退は爲す所を知らず、大德は豫て文筆に名ありと聞く試に書を致して一行の窮地を救ひ給へ』

乃ち大師は大使の依囑に應じ文を作り書に認めて四たびこれを州司に致した。州司これを披見するにその文艶麗にして其辭懇切、而も言はんとする所を言ひ語らんとする所を語り、日本遣唐使たるの意了々として明かである。州司の疑ひは全く氷釋し、從來の虐遇を謝しつゝ一行を款待すること掌をかへすやうである。且つ急使を以て長安に奏上したれば、皇帝は忽ち勅して十三ケ所の旅舍を設けて一行を請じ種々の資料を送り來り最も懇切に扱はれ、爰に再生の思ひをした。

其後五十八日を經て都からわざ〳〵存問の勅使が下つた、その儀頗る嚴重である、着船當時の一行は宛然囚人同樣に扱はれ、わざ〳〵勅を受けて來た身であり乍ら西海萬里の波に漂ひ、風波荒き海濱に悶死して異域の鬼となるのかと思へば故郷懷しく、茜さす東の空を見る毎に涙に袂の干る間もなかつたに、今は厚き勅遇を受け昨日の悲歎も忘れ果て、今日の榮譽を喜びつゝ思はず暗涙に咽んだのは、實に大使一人ではなかつたであろう。

この後久しからずして迎客の勅使が遣はされた、この勅使は十一月三日福州

に到り、七珍の鞍を置いて大使一行を迎へ入京の粧ひ美觀をつくし、見る者堵の如く集ふ人市をなし、日出國の威風大に異域に振つた。十二月二十三日長安城に入り宣陽坊の官宅を宿舍として充てられた。

斯くて大使はその任を全ふし、留學生橘逸勢及び大●●師を殘し、彼の貞觀二十一年、わが延曆二十四年乙酉二月十一日轅を回して歸朝の途に就いた。

●●大師は橘逸勢と共に西明寺なる永忠和尚の故院に住し、日々城中を巡りて諸寺の高僧碩學を訪れて歸依する人を求むるに餘念なかつた。一日人ありて靑龍寺東塔院の惠果和尚が非凡にして密敎の大家なるを聞き、卽ち西明寺の僧志明●談勝等五六輩と共に和尚を靑龍寺に訪れた。この惠果和尚と云ふは眞言正統の第七祖であつて、當時彼の土の敎界では重鎭と仰がれ學德一世を壓した高

僧であつた。

そも〳〵支那の密敎は初め善無畏三藏、金剛智、不空三藏等によりて傳唱せられ、殊に不空三藏の如きは時の玄宗皇帝より深く歸依を受けた、爲めに密敎の勢力は最も盛にして各宗中優に一頭地を拔いて居た。惠果和尚はその不空三藏の後を襲ひ、密敎正統の第七祖となり德望朝野を傾動し、皇帝王族もその門に入り求法の士は常に市をなした。

●●大師は靑龍寺に到り突然謁見を乞ふた。彼は今や佛敎界の重鎭とし、果た帝室の護持僧として威風上下を壓倒する高德である、是は海外から來た羈旅の客只名もない一介の沙門に過ぎぬ、果して面謁を諾するや否や、●●大師は大に危んで居た。けれど事實は全くこれに反し和尚は怡々としてこれを迎へ、且つ大●●師

の來るを待つあるものゝ如く異樣の口吻を洩した。

『われ、汝の來らんことを知りて相待つことや久し、今日適々相見ることを得たり、怡悅〳〵、報命喘々たり、法を付するに人なし、必ず速かに香華を辨じ灌頂壇に入るべし』

宛ら百年の知己に會したるが如く、和尚は未知の大師●に對して慇懃懇切到らざるなく、見る者奇異の思ひをなした。

斯くて大師●はその年の六月十三日に學法灌頂壇に入りて胎藏界の灌頂を受け七月上旬には金剛界の灌頂を受け八月傳法阿闍梨の灌頂幷に登壇投華得佛等悉く授かり、且つ遍照金剛の法號を受けた。この投華得佛の時に大師●の散華が前後二回共中央の大日如來の上に着いたから、和尚は不思議よ〳〵と再三感嘆してあつたと云ふ。

然るに惠果和尚の法弟に順曉阿闍梨と云ふ人がある。この順曉の弟子に玉堂寺の珍賀と云ふ者がある。この珍賀が大師●の受法を深く嫉んで何とかして妨げんとて和尚に申上ぐるやう、

『日本の坐主は例ひ聖人なりともわが宗門の徒にあらずして異域の人なり、この地の法弟をすて、何故一大事をこの人に授け玉ふや心得がたし、只顯教のみ傳へらるべし、何とて密敎を授ふ玉ふや』

斯く珍賀は再三惠果和尙へ迫つた、けれど深き所信のある和尙は更に此等に耳を傾くる筈がない、盡く秘法を授けて了つた。

然るに一夜珍賀の夢に四天王が枕頭に現れ、汝佛菩薩の相傳を妨げんとするは大罪なりと苛嘖せらるゝと覺へて夢覺む、珍賀いたく悔ひ急いで大●師の宿舍に走り恭しく大●師を禮し

『少納迂にして聖人の傳法を嫉み、これを妨げんとしたるに昨宵四天王の御叱りを蒙りたれば、今より心を改めて聖人に歸し奉るべし、何卒この罪科免し下さるべし』

珍賀は潛然として涙を垂れ大●師を三拜九拜してその罪を謝したと云ふ、以て大●師が如何に唐土に於て崇敬を拂はれしかを知ることが出來る

●●大師の入門以來授法附屬に餘念なかつた惠果和尙は附法の終りを告しと共に率然病魔の襲ふ所となつた。泡沫無常は世の習ひ、分段輪廻は里のくせ、何所か常住の所なるぞ、誰か不退の身なるぞ、されば尊きも卑きも若きも老いたるも今も昔も一人として逃れ難きは死の道である。

和尙の病魔次第に篤く入滅の期漸く近づかんとしたれば、和尙は本尊道具を始め兩部の大法一百餘部の金剛乘の法、及び不空三藏傳符の調度並に供養什物中にも佛舍利八十粒の中金色の舍利一粒、鍵陀穀子の袈裟は傳法の印信として盡く●大師に授け、更に告げて曰く

『われ、今この土の緣盡きて留ることは能はず、金剛界大悲胎藏この兩部の大敎は諸佛の秘藏卽身成佛の徑路なり、善く流傳して衆生濟度を希ふなり、胎藏

の師位また金剛界の大法、兩部の大法は徒弟の大徳各授かり、今汝には兩部の壇義印契漢梵違はず、藴奥をうけたること瓶水をうつすが如し、これ凡徒にあらず、三地の聖者なり、内には大乘薩埵の心を具し、外には小園沙門の相を示せり、願くは化を天下に垂れ、蒼生の福利を増せ、これ佛恩を報じ師徳に酬ゆる所以なり』

温情溢るゝ最後の遺誡を受けた大●師●は唯感涙に咽んで謹聴するのみであつた、和尚は更に目を見張つて衆徒に向ひ

『盛者必滅會者定離、日出づれば月かくれ油盡きれば火消ゆは物のつねなり、世尊はすでに涅槃に入り玉ひて吾等に示範を垂れ玉ふ、努力よ、努力よ、これ臨終に於ける名殘の言葉と知れ』

座に列んだ衆僧はひとしく暗涙に咽び、夢に夢路を辿る心地し、法衣の袖を押しあて、嗚咽するのみである。やがて和尚は蘭湯にそゝぎ手に法印を結び頭北面西右脇に臥して太陽の地下線下に沒せんとするが如く靜かに入寂した。時に永貞元年十二月十五日、春秋を重ぬること正に六十回であつた。人生元これ草頭の露、紅顔果してよく幾何ぞ、四大分れて五蘊去り、化して路傍の土となれば。年々春草の生ずるのみ、吁、果敢ないは人生である。

●大●師は悲歎のあまり道場に入りて紅涙を三衣の袂にそゝぎ、丹誠を凝らして終夜持念せらるゝに夜も深更に及びたれば、忽然として和尚の姿が現じた、大●師は愕然として兩眼を見開いた、和尚は大●師●を見下ろしつゝ莞爾として

『吾と汝とは生々世々師資の契淺からずして密教を弘通す、今や授法盡く終

りが願ひ足んぬ、われこれより東土に生を受けて汝が室に入るべしゆめ疑ふ可らず……』

その温容をもとめんとすればたゞ淡然たる一灶の香煙のみ、夢か、否、幻か、否、大師●はこの一言隻句肺肝に徹し、胸憶をつき、斷腸の思ひに住した、權者の善巧方便も亦奇なるかな。

……

絶妙藝能不レ可レ測
既知風骨無二人擬一
二王沒後此僧生
収二置秘府一是開レ情

嵯峨天皇

……

第六回　波瀾切不動

多年辛酸を嘗めて探求した不二法門は惠果和尚の付法によりて全くその玄底を窮め、且つ大師●●は三國を通じて眞言密教の第八祖たるべき地位を得られた。

●●の入唐求法の目的は既に達して了まつたのである。この時大師●●の得意や如何、意氣九天に沖する慨があつたであらう。

大師●●は此に宿世の佛緣淺からずして惠果和尚に會ひ、而も久しからずして死別の悲みに接し追慕の情は却つて百世の師にも勝つた。せめては墓碑を立てゝ高德の一端を萬世に傳へ、以て師恩の一滴に酬ひんとて自ら碑文を撰し十二韻の銘を記しこれを廟塔の下に建て、以て止みがたき切情を慰藉せられた。

當時唐土にありては李白●杜甫●韓退之●柳宗元等の詩宗前後に輩出し所謂文藝の極盛時代であつた。且つ惠果和尙は時の帝室の護持僧として德望一世を壓し青竜寺門下には一世の秀才雲集して居つたにも拘らず大師●●は羈旅の身を以て而かも入唐日尙淺きにも似ず恩師の建碑に當つてその碑文を撰したのに徹して●大師●が如何に彼地で重視せられつゝあつたかを知ることが出來る。且つ憲宗皇帝の敕を受けて宮中の壁に書かれてある王羲之の手跡が破損せるに大師●●敕を受けて筆を加へられたれば其筆力の妙神に迫まり、大に皇帝の賞讃を博し、五筆和尙の號を賜り、且つ歸朝の際拜辭するに當つて菩提樹の念珠を附し、これを以て朕と思へとの優諚を賜つた。これによつてこれをみるに由是觀之、當時大師●●は全く上下を壓倒し德望を一身に集めて居つたことが分かる。

多能多藝な大師●●は惠果和尙の他般若三藏等を訪れて智嚢を滿たし、其他經疏圖書の謄寫は更なり、詩文●書法●音韻の學より繪畫●彫刻●製墨●製筆●製茶●製紙等の末枝に至るまでこれを究めわが文化を助成せられたことは枚擧に遑がない。

當初、大師●●が入唐求法の志を立てた時の期間は少くも二十年間を確定してあつた、けれどゆくりなく密敎の大德惠果和尙に會ふて其秘奥を授けられたのみならず其正統を受け、且つ早く世に流傳して蒼生を救へとの慈誨をのこして入寂せられたれば、今や大師●●は恩師の遺敎を奉じ滔天の偉業を果すべき重責のある人となつた。初め二十年を期せられたるに僅か二年にしてその志願滿ち最早や此土に留まる要なきに至つた。爰に大師●●は橘留學生と相謀り、彼の元和

元年六月、わが大同元年遣唐使判官高階遠成の便船に乗じ歸朝の途についた。發するに臨み同輩の緇徒は更なり、翰墨詩宗その別離を惜み、詩文を爲りて以てその行を壯んにした。

船は八月明州を解纜し、滿帆に秋風を孕ませて見る〳〵岸を離れ波上に浮んだ。仲秋の碧空はまるで瑠璃のやうに晴れてある、漫々たる蒼海は鏡のやうに澄んである、流れ行く秋の淸澄の氣は瑟々として骨を引き緊めるやうである。

●●大師は大聖不動明王の尊像を安置し餘念なく誦經し海路の平穩を祈つて居られる。祈念し了つた●●大師は須臾凝念默想して居つた、船は進んで來て點々たる禿山が微かに波上に浮んで見へる。橘逸勢はツカ〳〵と打ち寄りて●●大師の法衣を靜かに引き船樓へ伴ふて行つた。樓には判官が雜司に酒つがせて早や陶然として兩眼をちらつかせて居る、海上は至極平穩である。

遠成は●●大師の姿を見るや崩れかゝつた膝を直し端然と座した。杯が巡るにつれて話はいろ〳〵と移つて行く、橘逸勢は彼地で學資の窮乏を告げ束修、讀書の用にさへ苦んで一方ならぬ困難したことの思ひ出を語り出し、時々大師●●を顧みては相槌を促すやうで、大師は●●さなり〳〵とその苦しかつたことの相槌を打つ、遠成は醉心地ながらも頻りに同情を表して居た。

何時の間にやら月は海上に浮み、水夫は潮風に嗄らした澁い聲で節面白く舟歌を唄つて居る。

ちゝはゝをみれば尊し　妻子みればめぐし
うつくし世の中はかくぞことわり……

餘韻嫋々として波間に消ゆて行く、一同はこの歌に聞きとれて少時恍乎として居つたがやがて判官は一段聲を高めて

『一昨年、越前守の入唐せられた船路は例なき難風に遇はれ、三四の兩船はあはれ行く方不明なりと石川副使より親しく承りげるが、如何にその時は心淋しく思はれけるよわれ察するさへ物あはれにこそ』

橘留學生は大師●●を振りかへりみて

『さなり、さなり、肥前の田浦を出船せしは……忘れもせじ七月六日の朝まだきなりその翌七日の戌の刻と覺しき頃より忽然として難風出で帆は裂け破れ舵は折れ流石の大船もまるで木の葉の如く弄ばされ、夜に至りては火を發して他船の安否を糺すにそれに應ずるものは第二船のみにして、殘る二船は更に火信なくあはれ海底の藻屑となりたるべし、わが船とても全く自由を失ひたれば唯天のなすまゝに任すより他なく、最早巨海に沈み魚腹に葬らるゝより外なし、と滿船一人として生きたる心地はなかりしなり』

語り了つた逸勢は猪口を手にしてグッと喉をしめらした、判官は座をすゝめて

『してその後は如何になりつるよ』

『さればなり此所に居らるゝ大德が聲高々と言はるゝには、必ず噪ぎ玉ふな、わが瑞穗の國は八百萬の神々ましまして加護を垂れ玉へば、イザ空海は般若心經を一百八十七ケ所の神々に法施し奉り祈り申さん、とて船首に座して丹誠を凝して祈念し玉へば、不思議や翌八日に至りて風凪ぎさしもの激浪も靜まりて覆沒の難を免れたり、人々は萬死に一生を得たる心地したり當時の

凄然たる光景を思ひ出せば今に身の毛立つやうに思はる』

逸勢はその光景を一氣に語り了つた、判官はこの話を聞き了りて幾度か點首き

更に眼を大師へ轉じて

「遖は大德にこそ、誦經の靈驗のあらたかなることよ、願くば大德この船もさる難なく無事に着津し得るやう祈念を凝し玉へ』

陶然たる判官も今逸勢の實驗談を聞いて怎やら怖氣が差して來たやうである、

●●大師はやをら口を開き

『その段は今から心安く思召せ、かねて船首に安置し奉る不動尊は靑龍寺の大阿闍梨の指導を受け、一刀三禮して愚衲が彫刻いたし、且つ大阿闍梨が親しく開眼供養し玉ひし靈像にましませばなどか守護し玉はざらん必ず龍神も

靈威に怖れわれ等の船を守り申さん、煩ひ玉はず心易く思召せ」

●●大師より親しく不動尊の靈德を聞いた一行は非常に喜んだ、この不動尊こそ世に云ふ波切不動である

爾來、旬日を經ぬうちであつた、一日天の一角に暗雲が崩したかと思へばみる〳〵瀰漫し、一陣の烈風サッと襲ふかと思へば狂瀾怒濤天を蹴り、眞に天地晦冥、船は正に波濤に粉碎せられんとした、●●大師は不動明王の前に端坐し瞑目持念せらるゝこと少時……

不思議！、不思議!!、

不動明王は天の一角を睨み、御劍の手頻りに動き波濤を縱橫に切り玉ふかと思へば颱風次第に靜まり、怒濤その威を潛め、秋空月をかけて水を照し、海は宛

然油を流したやうになつた、この靈威を目撃した者滿船一人として感ぜぬ者はなかつたと云ふ、この靈像は現今高野山南院に藏せられてあると云ふ。

斯くて一行の船は十二月二十日博多へ無事入津した

●●大師は思ふ所ありて暫く錫を太宰府に留め、超へて二日高階判官に托して歸朝の旨を奏上に及び、併せて將來せる佛像經論等を献じた。

●●大師よく三密の惠灯をかゝげ五智の法水を汲み正に本朝に於ける密教の高祖として活舞臺に躍如たる期が逼つて來た。たゞ恨むらくは大●●師に敕許を下し玉ひし桓武帝は去る三月崩御あらせられたことで、大●●師は千載の恨事として萬感胸を抉つたであらう。

第七回　活動の第一歩

太同元年十月博多に着津した大●●師は直ちに京師に入らずして太宰府觀音寺に駐錫し、他日滔天の偉業を張らん爲め英氣を閑地に養はれた。香春神社に寮せられたも東長密寺の建立せられたのもこの時であつた。

二年の秋に至り敕して入洛を促されたれば倉皇として京師に入つた。大●●師は仁壽殿に於て親しく今上、平城天皇に拜謁を賜はりて密教弘通の優諚を拜し、泉州槇尾寺に住すべき旨命ぜられた、大●●師は無上の面目を施し欣然として退朝し命のまゝ槇尾寺に入つた。この寺は大●●師が二十歳の延暦十二年に勤操和尚に隨つて來り得度した故院である。今來つて此處に住む大●●師は定めて腑仰感慨に

堪へなかつたであろう。

一旦槇尾寺に錫を下した大師は日ならずして大安寺に遊んだ、この寺には勤操和尚と甥の智泉が待つて居る、智泉は大師の入唐後幾何ならずして登壇受戒し今は天晴の沙門となつて居る、大師の姿が寺の中院に現はれた時智泉は更なり勤操和尚の歓びは一方でない、一山盡く歓喜の祥雲に覆はれ笑ひの聲は室外に洩れた。

かくてその年の十一月八日大和久米寺に於て初めて大日經疏を講じた。特に久米寺を選んだはこの塔下から斯經を得たからである、この開講こそ實に密教第一歩の法電にして大師が三十四歳の暮れであつた。

いよ〳〵大師は蘊蓄を傾倒して法皷を打つ機が來た、けれど鵬翼を天下に張りて舊佛教に對抗せんには勢ひ北嶺の坐主と握手すべき必要がある、此に於て大師は大同四年二月三日叡岳に登り刺を澄師に通じた、これ平安朝に於ける佛教界の雙璧が直接交誼を結んだ始めで、あつた。

五月、平城天皇は位を皇弟嵯峨天皇に讓り玉ひ密教の興隆はます〳〵順境たる兆を示した。七月十六日勅命により槇尾寺から高雄の神護寺に移つた。勅によりて世説の屏風を書かれたのはこの年の十月の十四日であつた。

弘仁元年夏の初めであつた。大師は主上の親しき召により參內せられた。折から三論宗の道昌、法相宗の源仁、華嚴宗の道雄などの龍象が天機奉伺の爲めに治部省へ集つて來た。

全體眞言宗に於ては敎相門事相門と云ふ二種の要門を立てる、敎相門は六大

法身四種曼荼羅等の最上乘を論證し、事相門にあつては三密相應の靈感を現在に實現せしむと云ふのである。現身成佛を談ずるのは卽ちこれである、此に於て諸宗に於ては更なり、深く大師を信じ居玉ふ嵯峨天皇に於ても現身成佛を談ずるに餘疑を存じて居玉ひ、好き機もあらば論證させてみばやとの思召があつた、然るに今日ゆくりなくも諸星が會したので、今ぞ日頃の宿志を果すべき好時機と思召し、乃ち大師と諸師とを清涼殿に會せしめ玉ふた。

今日集つた諸宗の高僧達は大師を除いては盡く南都の人々のみである。この人々は豫ねて傳敎大師が法相華嚴等の所謂奈良僧侶を睥睨し、攻擊的の態度で叡岳を開き、これぞ王城の鬼門除け鎭護國家の妙宗ぞと、一乘止觀を提げて台宗を立てたので頗る憤慨して居る、今又大師が入唐して密敎なる新佛敎を將來し、四種曼荼羅を振り回し現身成佛を唱導するを片腹いたく思ひ、一介の若沙門何事かある　折もあらば散々に折伏して密敎弘通の息の根を止めて呉れんものと日頃から巧んで居つた矢先であつた。

治部省の判官から法敵の空海が參內して居る噂を聞き、諸師は何となく肉躍りがするやうに感じた、けれど此所は禁闕である、滿らぬことを申立てして皇威を犯し奉るやうなことがあつては一大事ぞと躍る心を押し靜め、徐ろに天機奉伺の旨を言上し將に退朝せんとした。

俄然、やんごとなき敕命は下つた。清涼殿に會し佛敎の眞諦を輪講すべしと南都の諸師は雀躍して清涼殿に導かれた。主上には群臣を隨へさせられて出御あらせられた。イザ御前にての法論ぞ、今日こそは時節到來、法敵空海の鼻

を折り、密敎護持の鋒先を摧いてやらんと堅唾呑んで持ち搆へた。

主上には玉音朗々として、各自宗義を述ぶべき旨仰せ出されたれば、何れ劣らぬ有宗空宗の智象、佛華法華の義龍なれば、辨才浪をわかし、論難の刃を研ぎ護法清辨の往事も斯くやあらんと思ひ出でられ、衆賢世親の囊行こゝにして見るべきかと覺へる位で、滔々として自が奉ずる宗義こそ佛法の眞諦、釋尊の本懷ぞと誇張すると共に、果ては密敎非佛意を盛に鳴らしあらん限りの辨才を盡して、旗皷を張つた。

けれど大●師は默然として一言の演ぶる所がない、諸師の腹はもう密敎に對しては勝閧あげたやうに思ふて居る、殿上人は何となくもどかしそうに大●師を促した、けれど大●師は隱忍して一言の開示がない。やがてやんごとなき敎諚が大●

師に下つた。今は默止しては居られぬ。大●師はやをら口を開き、

『有難き敎問を蒙り身の光榮に存じ奉れば眞言に於ける判敎を略して奉答すべし、そも當宗では顯密二敎の判釋あり、顯は顯露の義にして應化身の所說たる顯現淺略の敎を申し、釋迦一代權實の敎卽ちこれに候、密と申すは所謂秘奥の義にして法性身の所說たる秘密深奥の敎を申すものにて、大日所說の金胎兩部卽ちこれに候、されば顯敎は隨他意の說法にして、他の病緣に應じて治藥を與へし逗機益物の方便に候、密敎はこれに反し隨自意の說法にして、自己の眷屬に對して自受の法樂を現ぜし內證の實境に候、此に於て九顯一密の法を立て法相三論は論なく、華天一乘の法と雖權乘たるを免れず候、佛と雖圓位の權佛なり、然るに眞言の佛果と稱すべきは獨り十住心の法身の

密益に限るものに候、故に顯密二教の成佛の遲速勝劣は辿も一日の論にあらず、されば手に印契をなし、口に眞言を誦し、心よく三昧地に入れば此に三密加持して現身成佛す、この故に現身成佛を說くは唯眞言法のみに候」

●●大師は無碍の辯を以て懸河の流るゝ如くに說いた。

今まで手に汗して聞いて居つた諸師はハッと大●●師を睨み、

『世尊一代の所說何れを窺ふても成佛得度は三祇劫を經ると說き玉ふ、然るに眞言に於てのみ父母所生の身にて成佛すと說く、こは定めし自家勝手の理たるべし、さもなくば確然かる典據ありやこの義如何」

諸師の不審は最もである、通佛敎に由れば凡夫が佛階に到らんとするには十信十住●十行●十廻向●十地、等覺●妙覺の五十二位を經て初めて佛果を證するので

これに到らんとするには三祇劫の時間を費すとあるからである。

●●大師は靜かに四邊を見回しつゝ、

『先づ菩提心論を繙かるべし、惟眞言法中のみ卽身成佛するが故にこれ三摩地の法を說く、諸敎中に於ては闕いて書せずとあり、敎十經には餘敎に成佛を說くは並にこれ方便引攝の言のみこれ究竟の實語にあらずと、その他金剛經にも一時薄伽梵金剛界遍照如等と說き始めて遂に三昧地を修する者は、現身に無上覺を成ずと具に說かれたり、疑らくは一たび卷を開いて見玉はゞ瞭々として明かなるべし』

博學な大●●師は縱橫に經論を引證し來りて密敎の實理を談じ、靜寂の裏に一切を照破した。主上は大●●師の所說を聞し召し

『空海僧の講論は精微をつくし、疑雲稍散ずと雖朕いまだ卽身成佛の現證を見ざれば餘疑なき能はず、されば此に現證を示し以て卿が說く密敎の極成をあらはしては如何』

綸言汗の如し、大師はこの聖旨を拜受して卽身成佛の現證を示さねばならぬ破目となつた、諸師はいと興ありげに感じ、齊しく大師の敕答や如何と耳を澄した。大師は堂上に頭を摺り恭しく

『優諚を賜り空海身に餘る光榮に候、元よりこの一身は汚染きはまる凡夫に候へども三密加持の不思議により密敎の秘法を天覽に供へ奉らん、天威をけがし奉る罪輕らず容し召さんことを願ひ奉る』

敕答し了つた大師は寂かに立つて南に向つて趺坐し、兩眼を閉ぢ手に印契を結び、口に眞言を誦し、秘觀を凝すこと少時、

南都の諸師はこの小僧何ごとを仕出かすならんと殆んど嘲弄的の態度でながめて居る、

アラ不思議、眞實不思議である、見る〳〵大師の身から光明がピカ〳〵と出て、そして肉身は忽ち遮那の眞容とあらはれ、鳳闕立ち所に玻璃の妙界に耀いた。

目のあたり毘盧遮那佛の靈姿を拜した諸師や殿上人は驚かざるを得ぬ、往昔釋尊出世の時八才の龍女が速證を示して智積身子の疑ひは止んだと云ふことがあるが、今は三密の祖師が現身成佛を示したので偏執の諸師も妄念忽ちに晴れ

（口繪參照）

端嚴なる相好、精微妙軀の佛身を目にし玉ふた主上の叡感斜ならず幾度か不思議よ、不思議よと仰せられた、

赦如たる光明が澹然として消へるかと思へば、今までの大毘盧遮那佛卽ち一個の空海が端然として趺座して居るのであつた、諸宗の高僧達は恭しく●●師を頂禮し、滿庭の殿上人は靡然として欽仰した。爾來、●●師は高雄にありて心靜かに誦經と持念に耽り、以て密敎弘通の好機を待つた。

この歲の九月、藤原薬子は其兄仲成と謀りて太上天皇をそゝのかし申して重祚を迫り、已皇后となりて一族の榮華を恣にせんと企てた。

初め平城天皇は不豫の故を以て大同四年五月皇太弟に位を讓り玉ふた、然るに其後に至つて御惱みも御平癒あらせられたから奈良の舊都に遷らせ給ふた、この時薬子の企謀で奈良から詔敕を發して平安京を廢して帝都を奈良に復せんとした。而して薬子は太上天皇と聲を同じく東國に下りいよ〳〵重祚の催しにかゝつた。

この報一たび京師に傳るや上下駭愕し人心惘々として不安の淵に陷つて居る廟議は此に阪上田村麿をして美濃國に遣へしめた。けれど主上の軫念はまだ輕じ玉はぬ、そこで密敕を高雄に下し玉ひ、大師を召し東寺に於て修法祈禱せしめ以て寶祚の安泰を祈らしめられた。八幡大神が武内宿禰を具して影現せられたと云ふはこの時である。この神影を靈木にて彫刻し皇祚無窮、鎭護國家の爲めに奉安したのが東寺の八幡宮であるとのことである。

間もなく仲成は流矢に當つて斃れ、薬子は事の成らざるを知り毒を仰いで自

大師東寺の別當となる

應天門の拋筆

害した、太上天皇幷に皇太子たる高岳親王は奈良に入り玉ひて落飾せられ亂漸く平いだ。

上下震撼したこの大亂も又に劒らずして平いだはこれ大●●が祈禱の感應であると叡感斜ならず直ちに東寺の別當に補し玉ひいよ〳〵御歸依あらせられた。

この後久しからずして大●●は高雄に於て仁王經の大法を修して國家安泰を祈つた、これ大●●が社會的活動の第一歩で、所謂四朝五十一ケ度修法の初めであつた。

この歳灌頂の職位を法弟實慧に授けられた。敕によつて應天門の額を書せられたのもこの年であるが、世には應の字の一點欠けたりければ大●●は下から筆を拋つてこれを補はれたと傳ふるも果して如何にや、多少の疑問なき能はずである。

大師神勅灌頂を受く

空海が心の内に咲く花は
彌陀よりほかに知る人はなし

―弘法大師―

第八回　兩部神道並座主の訪れ

弘仁二年二月一日大●●は嵯峨天皇と共に、後に眞言院と改まつた宮中の齋所で神道灌頂を受けられた。これ大●●の神佛調和說を具體的に顯したものであつた。神佛調和と云ふことは其源聖德太子に發し、爾來行基菩薩、良辨僧正によりて其歩を進め、神佛融混の思想漸く國民の腦裡に泌み渡つて來た。延いて傳敎大師が本迹緣起神道說を唱導するに當つて大●●は兩部神道說を唱へられた

眞言宗では金剛界、胎藏界の兩部を立つ、所謂金胎兩部の曼荼羅である。この金剛界と云ふは智法身であつて果曼荼羅である、胎藏界は理法身であつて因曼荼羅である。これを悲智の二門に配すると金剛界は智恵、胎藏界は慈悲である。けれどこの兩部は別體であるのでなく理智不二でその全德を具するものが大日如來である。

この金剛界と云ふは所謂堅固の意であつて利用の意を含んで居る、秘密の理の常住不變であつて破壞せられず、而かも大日如來の智を以て業障を消滅する作用の勝れた意である。胎藏と云ふは母の胎内に臟腑とわが子の身體を包含する如く、六大法身が法界に遍滿して一切法を攝在するの意である。而してこの兩部の大日は他に求むべきにあらず、本來一切衆生の已心に具するものである

から所謂三密加持を修して卽身成佛するを云ふのである。

要するに天台に於ては理を本とするに反し、大師は事を本として理を配合し諸法の本體を地・水・火・風・空・識の六大と立て、六大卽法身にして佛も菩薩も猫も杓子も迷悟染淨雜然としたものなれど、その體は皆同じく六大にして一切の諸法盡く大日如來ならざるはない。然るに吾等は迷情の爲めに蔽はれ、本有の大日法身の德用を顯現することはならぬ故に三密の行を修して佛果を證せねばならぬ。そは六大所造のこの身、父母所生のまゝにして三密加持を修すれば證果の大益を得ると云ふのである。

この眞言の敎義から說いて大日如來は卽ち天照大神にして諸佛菩薩は卽ち八百萬の神々と同體であると談ずるのである。斯の如く兩部神道說は在來の如く

根底のない神佛調和說にあらずして、密敎の深遠なる敎義に淵源し神佛調和を敎義上から試みたる最も確實な根據のある說にして在來の調和說とは大にその趣を異にして居つた。

曾に●●大師は敎義上から調和說を試みたばかりでなく、既に神道灌頂を大中臣智治麿に受けたるが如き、或は高野山開基の時四社大明神を祭りて守護神となせしが如き、或は八幡神を東寺の護神と崇めたる如き、或は稻荷神の爲めにその勝地を撰びたるが如き、殊に宮中に眞言院を立て、鎭護國家を祈りたる如き神佛二敎をよく調和し佛敎をして國土と時代とに順應したる功績は偉大なものである。

この年六月二十七日、敕によりて劉希夷集、王昌齡詩格を手寫し、飛白の書體と共に奉獻した。●●大師がわが國書道の祖として古今獨歩の譽れ高く、當時嵯峨天皇と橘逸勢と合して日本三筆と唱せられたるが、嵯峨天皇の如きは絶妙の藝能測るべからず、二王の沒後この曾生す、既に知る人の擬するなきを、秘府を收置して最も情をひらくとまで大師の能書を激賞し玉ふた。

初め大師が●●澄師を叡山に訪問されたのは大同四年二月であつたが、超へてその年の八月二十四日澄師は法弟經珍なる者を使者として書を齎して秘書の借覽を乞はれた。

これがそも〳〵兩大師の文通の始まりで、其弘仁三年夏大師は書を叡岳に飛して悉曇の疑義を質された。二明星の款情は漸く綻み初めた。

丁度その年の九月二十七日であつた。叡山を下りて平安の南へ頭陀に出た最澄師の姿は夕陽正に鴨川の流れに映ずる時瓢然と乙訓寺の玄關へ現れた。

『賴まう……』

悠然と搆へた澄師は一人の弟子を後にして橫柄に言ひ放つた。

『應……』

若い沙門が玄關へ立ち現れて障子を開いた。見れば色の黑いテップリと肥へ太つた大きな出家が檜笠片手にし、錫杖を突いたまゝ立つて居る、その後にはこれも笠と杖とを持ち香染の麻の法衣をまとふて直立して居る。

去年の十一月から大師●●は乙訓寺の別當に補せられ爾來この淸庵に住んで御座るので色んな人が出て來る、けれど何れも〳〵玄關から三拜九拜の體である、

それに今日の沙門は何と云ふ橫柄であらう、大體始めから障子の紙が破れるやうな大聲出して『賴まう』などゝその言ひ方からして橫柄ぢやと思ふて居たに玄關先へ出でみれば其態度亦橫柄に突き立て居る心憎さ。わが師の學德を慕うて入門に來たのであろうか、けれど貌つき目つきから見ればホンの新米者とも見へぬが、ことに由ると奈良からでも詰問に出て來たのかも知れぬ。

玄關先へ出で來た若い沙門は滿らぬことを考へて居つて少時無言の體であつたが、さりとてそのまゝ返すことも出來ず、これも權柄づくで

『何れから?』

澄師はあまりその態度が可笑しいのでニタリ笑ふた。けれど何所までも權柄づくな若沙門は閻魔のやうな面して睨めつけて居る。

『愚衲は叡山の最澄であるが、今日山科へ頭陀に參つた序に、阿闍梨に會はんとて罷り出たるものなれば一應取次いで玉はれ』

若沙門は吃驚仰天、今まで閻魔のやうに睨めつけて居つた恐ろしい顏は忽ち驚きのあまり蒼白になつた、それもその筈である、當時雄嶽に據り一世を風靡した偉人、最澄師が來訪しようとは夢にも豫期して居らなんだからである、わが師と一兩回文通なされたとは微かに聞いて居つたけれども師直々に御貴臨などゝは考へも及びもつかんからである。若沙門が今までの態度はからり變つて恭しく敷居に兩手を突いて、

『阿闍梨には遠方の所をよくこそ御來臨下されました、わが師は幸ひ在庵に候へば御取次いたし申さん須臾御待ち遊ばされ』

件の若沙門は早速內殿に入つて上足の法弟へ申入れた、須臾にして上足の弟子は玄關へ現れて澄師を請じた。

平安朝佛敎界の二大法梁、新佛敎の急先鋒は今乙訓寺の閑寂な方丈で爐を隔てゝ相對した、大●●師は三十九歲、澄師は四十六歲の男壯りである。

互ひに一別以來の久濶は叙し了つた。澄師はやをら口を開いて前年大●●師が訪問せられたことゝ秘冊借覽の謝辭を陳べ

『阿闍梨は御在唐中によくもあれだけの珍冊を筆寫したり求めたりせられしぞ愚衲は在留九ヶ月なりしも左程に得物も仕らず阿闍梨に比せば面目もなき次第なり』

大●●師はニタリ笑みを含んで

『讃辭恐縮に存ず、入唐後は橘太夫と西明寺に留まり寸閑を惜んで筆寫に努めたれば、望みのまゝには參らずもわが朝には未だ渡來なき經疏を寫し得たりその外惠果和尙の囑せられし珍冊もあり、御のぞみとあらば何時にても貴覽に供すべし』

やがて香しい銘茶が運ばれた。これは當時にあつては仲々の珍品であつたのである。今でこそ茶と云へば何でもないやうであるが吾國で茶樹が育ちかけたのは建久年間からである、勿論嵯峨天皇の時もこれが栽培を試みられたけれども成効しなかつた。廣くこれが行はれるやうになつたのは榮西禪師が入唐し宋の江南から其の種子を齎し歸りて初め築前に植へ、自ら喫茶養生記を著してその德を頌したので栂尾●春日●宇治に播殖し今では殆んど全國に行き渡るやうになつたのである。

●●大師は在唐の間勿論製茶のことも究められたやうであつたが其種子が播殖せずしてそれまでの運びに至らなんだのは殘念であつた。それで今席に運ばれた茶も盡く支那からの渡りものである。

澄師は茶を一氣に喫み干して幾度か舌皷を鳴らして船載の珍味を賞した。これから二明星の對話は茶に始り更に轉々して入唐當時の遭難から彼地に於ける互ひの懷舊談に花が咲いた。

淸話はそれからそれへと傳つて行き綿々として盡きぬ。果ては本地垂迹說より兩部神道に及び、南都僧侶の評價に移つて行く。

澄師は端然と座し法衣の襟を正し事新しく改つて

『愚衲の入唐は台宗のみ究めて密教の造詣を忘れしは今に思へば物悔ひにこそ願くは阿闍梨受法を許し玉へ』

澄師は今淡々として自己の所求を披瀝して大●に乞ふた。昔時の高僧は法を求むる爲めには頗る熱心である。吾人はこれによりて益々其器の非凡なのに推服せざるを得ぬ。

大●はその言葉を遮つた、

『空海は年歯未だ不惑にも達せぬ一介の凡僧なり法梁は内供奉十禪師に在しまさずや』

澄師は膝をすゝめた

『網位何者に候ぞ、國師が如何に、且つ法を求むるには長幼の序あるべきに非ず、殊に愚衲が受法灌頂を希ふはこれ一人の爲めにあらずして法界の利益に候』

澄師は頗る熱心である、眞摯である、大●は全くその求法の胸奥を看破しそして快諾を與へられた。

二更、三更何時しか過ぎて夜色沈々たり、けれど二人の清話は更に盡きぬ、秋の夜長も將に徹せんとした。登壇受戒を容れられた澄師は、翌朝勇んで出立した。

超へて二日、大●は乙訓寺に產した柑橘千顆を宮中に獻じ、併せてその別當たるを拜辭して高雄へ歸住した。

十一月十三日には澄師から大師へ砂糖、藻海、薯蕷子等を贈り十五日には高

雄へ來り金剛界の灌頂壇に入り、十二月十四日には胎藏界の灌頂を受けた。

初め大師が法弟實慧の爲めに授法灌頂してより爾來公に道場に於て灌頂を授けられたのはこれが嚆矢である。されば當日は澄師の他叡山の學徒、沙彌、高階判官等實に百四十五人の緇素に灌頂を授けられた。灌頂と云ふは香水をそゝぐ意にて傳法灌頂、學法灌頂、結緣灌頂の三種類がある。

澄師は今や兩部の灌頂を受け了つた、進んでは傳法灌頂も受けばやと希望の光明を指しつゝ欣然として高雄を辭した。大師亦莞爾としてこれを見送られた兩雄の意氣躍如として目に見へるやうである。

この年左大臣冬嗣の爲めに興福寺に於て鎭壇の法を修す、これ吾國鎭壇修法の始めである。

興二海公一飲レ茶送二歸山一二首

太上天皇（嵯峨）

今秋唔語亦良緣。
稽首傷レ離望二雲烟一。

道俗相分經二數年一。
香茶酧罷日云暮。

第九回　高野の開基

時は弘仁七年五月の中旬である。朝靄立ち罩めて山も木もぼんやりと紗に包まれたやうに薄く見る、嵐氣そよ〳〵と梢にわたる

此山は名にしほう吉野の奥で山岳重疊し老樹鬱蒼として枝を交して天を蓋ひ樹下の苔は打ち濕り勝ちなのは日光の遮ぎられたる故ならん。崩れかけたる社

殿の前は人の通ふ小徑のみ殘し、鮮苔青く地を埋めて居る。

今しも祠の前に額き淙々として鳴りひゞく谷川の音を耳にしながら、山の景色を樣子あり氣に打ち眺む一人の行脚僧がある。三衣一鉢に身を托し朝まだきから冷々たる水晶の珠を拂ひつゝこの山へ踏み入つたるは、そも如何なる宿願を籠むるやらむ。

行脚僧は西を仰ぎ、北を顧み山の嶺をためつすかめつ眺めて居る。この行脚僧こそ大師●●が勝地靈峰を求めて密敎の道場を開き法幢を飜さんと探して居らるゝのであつた。世には大師●●が高野山を開いたのは傳敎大師の叡岳に對抗せん爲めであるなど言ふ人もあるが淸懷雅量な大師●●が怎してそんな俗氣があろう。

けれど初め大師●●は高雄の幽寂を愛して居られた。然るに大師●●の德光は四方に喧傳し、その豊富なる學才、珠の如き偉德に浴せんとて入門する者、日々ます〳〵加はり、今まで幽閑であつた高雄は忽ち門前市をなすやうになつた。これでは三密加持を修するにも、果た緇徒が修法する上にも適當の地と云へぬやうになつて來た。

且つ東瀛に密敎を弘傳し、三密加持の法灯をかゝげよとは恩師惠果和尙の遺誡である、それにしては高雄は規模が少さい、もそつと俗塵を離れた形勝の地靈峰の妙域を得て法幢を立てたいの企望は晝夜念頭に往來した。此に於て大師●●は一鉢一囊に身を寓し瓢然大和に出られたのであつた。

社前から四峰を望んで居られた大師●●の側に何所からともなく一人の獵師が現はれた。大師●●の輕裝を上から下まで見戍りつゝ頻りに小首を傾けて居る、靈峰

の探求に餘念のない大師●●は一向に氣がつかず去つて他に移らうとせられた。

最前から無言のおしで眺めて居つた獵師は大師●●の去らんとするを見て急いで立寄り

『御僧、何物を御探し相成るぞ』

今までは八氣ない奥山とのみ思ふて居られた大師●●はこの唐突の尋ねに稍驚きの体で獵師の姿を見つめられた。獵師と云ふは顴骨の秀いで宛然銅色のやうな顔色して筋骨逞しい大男である。手には弓を持ち黒と白との二匹の犬が繩に曳かれて隨いて居る。大師●●は笠を手に受けつゝ

『貧道はこのわたりに靈山勝地はなきかと求むる者である』

大師●●は何氣なく應へをせられた。

『我もさ存じつるなり、して御僧は如何なる山こそ氣に召し玉ふぞ』

獵師としては尋常氣でない言ひ分である。大師●●は飽まで不審で堪へられぬ。元より自分の目指す所は聖地靈峰を求むる爲めではあるがこの獵師亦不審な奴である、さりとて變化魔性の者でもあるまじ、先づ獵師の身元調べをしてみようと決心せられた大師●●は山の事は扨て置き

『御身の姿をみれば獵を以て渡世せらるゝやうに見受くるが何地の人にておはすか』

獵師は破顔一笑、赭い顔に白い齒をむき出して

『御僧の不審最もにこそ、我は南山の犬鉤なり、して御僧は何の爲めに靈山を求めらるゝにや、障りもなくば洩させ玉へ、我は常に山のみを徘徊すれば何

れの山も何れの嶺も踏まざるはなし、御僧の望みに隨ふて指圖いたすべし』

獵師の親切は語と顏とにあり〳〵と顯れて居る、今は大師も秘すべきでない。

『貧道の靈山を求むるはその地に草庵を結びて、心靜かに佛道を修したき爲めにこそ』

聞き了つた獵師は何幾か兩眼をしばたゝき

『さても五濁の世には似もつかずいみじき御心掛にこそ、その御心願ならばこれより遙か紀伊國伊都郡の南に當りて幽寂を占むる靈山あり、この山ならば必ず御僧も御滿足なるべし、去つて實驗し玉ふべし』

大師は思はず微笑し

『さなり〳〵、その山は高野となん申しつるよ』

往年、大師が勤操大德に沙門たらんことを希はれし時、大德は大師の若年なるを見て、如何に天才とは云ひ乍ら未だ稜角か除れぬ、心身を鍛練して圓熟の境に到らねば沙門として大事を爲すことは出來ぬ、さればこれより聖地靈峰を跋涉して心膽の修練をなし、圓熟の境に到らば去つて歸れ、法弟としてわが門に入るを容すべしと訓誡せられた。この時大師は大德の訓誡に激奮せられあらゆる山川を跋涉して苦行し、聖地勝區を訪ねて心身を練つた。

この時、高野山を過ぎてこの山は他山に比すれば幽靜の地にして、何となく奥床しい靈山であると感じて居られたのであつたが、今獵師の言下にハタと當年の記憶を喚び起こし、心に思ひ當つたのであつた。

獵師は膝を打つて

『御僧よくこそ御存じである、その高野こそ、必ず御僧の心氣に叶ふべき靈地にこそ』

●●大師は獵師の言を聞いて何となく心が勇んで來た。

『貧道も二十年前に一度足を踏みたることありしかど、今は記憶もたへ〳〵になりつるによくこそ語り出しくれられしよ、千萬忝く存ずる、さればこれよりあの山に臨み土地を撰び申さん、これにて惜しき袂を分つべし』

錫を手にした大●師は幾度か謝辭を述べた。獵師は尙も語を次いで

『されど御僧、これよりは密樹繁り幽草歩々に深ければ足の踏み所も知れず、いざ御僧の道案内としてこれを進せん、辭退は無用伴ひ候へ』

獵師は今まで手にして居つた綱を解くよと見へたれば黒白の二犬は欣然と尾を振りつゝ●●大師の前に立つて進んで行く

●●大師はこの奇しき案内者を受けたる好意を謝しつゝ山路を急いだ。犬は前になり後ろになり、地に鼻をうごめかしつゝ山を登つて行く、●●大師はこの東道を見失はじと深い樹間をくゞり、繁つた山草を押し分けて尾いて行かるゝ。

何時しか太陽も西に傾き夏の日永ももう暮近くなつて來た、やがて大きな河を渡ると共にさゝやかな里に出た。●●大師はホッと深い溜息を洩した。

朝まだきから深山に踏み入つた●●大師は終日犬の導くまゝ奇峰重巒を辿り少からず疲勞した。先づ民家に入つて一夜を明しこの疲勞を醫せんとて宿を求められた。

主人と云ふは五十の坂を三つ四つ越したばかりに見ゆる里には似合ぬ風采の

よい男で、厚く大●●を待遇した。夕食果てゝから宿主の尋ねるまゝ、大師は高野の靈地に踏み入り草庵を結ばんとの望みある由を告げられた。始終のはなしを聞いた宿主は深く感じたやうに

『御僧の仰せの如く高野の山は又なき靈嶮にて、殊に絶勝の景を恣にし、且つ山上の南方は幽平の原ありて堂塔を立つるには又なき勝地に候、御僧若し御厭ひなくば明朝御案内申すべし』

翌朝、大師はこの宿主と一疋の犬とに伴はれて登山した。峯に達するかと思へば件の宿主も二疋の犬も何所ともなく姿を沒して了つた。世にはこれを高野明神が案内せられたのであると傳へて居る。

大●●は忘我の境に入つて地形を見とれて居らるゝ。葱嶺銀漢に挾んで白峯碧

波につき、東西は龍の臥せるが如くにして流行の水あり、南北は虎の踞れるが如く捿息の地あり、浮査に乘らざれども忽に雲漢に入り、妙藥を嘗めざれども神窟を見ることを得、妙高をさして友とし、輪鐵を引いて帶とし、修禪の地としては最も好適の地である。

大●●の心は少からず動き直ちに高雄に歸り、六月十九日一篇の上奏文を記して奏上せられた。

沙門空海言す

空海聞く、山高ければ則ち雲雨物を潤し、水積れば魚龍產化す、この故に嵴閣の峻嶺には能仁の迹休まず、孤岸奇峰世を觀ずるの蹤相續く、其由る所を尋ぬるに地勢自らしからしむ。又台嶺五寺の禪客、肩を比し天山一院の定

侶袂を連るあり、これ則ち國の寶、民の梁なり。

伏して惟ふに我朝歷代の皇帝心を佛法に留め玉ひ金剎銀台櫛の如くに朝野に比び、義を談ずる竜象毎寺林をなす、法の興隆是に於て足らん、但だ恨むらくは高山深嶺に四禪の客乏しく幽藪窮巖に入定の賓まれなり、實にこれ禪教未だ傳らず住處相應せざるの致す所なり。今禪經の說く所に準ずるに深山の平地最も修禪に宜し、空海少年の日好んで山水を涉覽す、吉野より南に行くこと一日、更に西に向つて去ること兩日程にして平原の幽地あり高野と名づく。計るに紀伊國伊都郡の南に當れり、四面高嶺にして人の蹤蹊を絕つ。今思ふ、上は國家の爲め、下は諸の修行者の爲めに荒藪を芟夷して聊か修禪の一院を建立せんと

經の中に誡めあり、山河地水は悉く國王の有なり、若し比丘にして他の許さゞる物を受用すれば卽ち盜罪を犯すと、加之ならず法の興廢は悉く無心にかゝる、若くは大若くは小、敢て自由にせず。望み請ふ彼の空地を賜ることを蒙り早く小願を遂げんことを、然らば卽ち四時懃念し以て雨露の施しに答へん若し天恩允許あらば請ふ所司に宣付せよ、輕しく震扈を塵がし深く悚越す

沙門空海上表

弘仁七年六月十九日

七月八日太政官から高野山を永く大●●師に賜ふ旨報せられた。是に於て大●●師は泰範、實慧に命じて山に登らしめて地を拓き二三の草庵を結ばしめられた。これ金剛峰寺の創開である。

閑林獨坐ス艸堂ノ曉　三實之聲聞ク一鳥ニ
一鳥有レ聲人有レ心　聲心雲水但了々　―弘法大師―

第十回　行脚化益

今では交通の便が開けて山間の僻地に至るまで滊車や電車が四通八達して來たから名勝舊跡の世に紹介せらるゝものも多いが交通の不便な處では往々にして勝地住所の空しく往訪の跡を絶へ、次第にさびれ行くものも少くない、昔の東海道五十三次と云へば仲々喧しかつたもので、隨つて種々な歷史を持ち舊跡に富んで居る、だからわざ〳〵米國あたりから來て五十三次の驛亭を膝栗毛の

徒歩旅行を試みられたを札博士もあつた。

丁度、この五十三次の江州醒ケ井驛と鳥居本驛との中間に磨針峠と云ふ坂がある、名に響いた程高い峠ではないが、それでも東の方の麓から峯へかけて民家が阪なりに散在してあるのも何となく奥床しい。

滊車のない時分は旅人の往來梭の如く隨分繁昌したものぢやそうなが、今では全然廢つて了まつて一の旗亭さへ見當らぬやうになつた、星霜幾百年古今を腑仰し腸を斷つの慨がある。

この峠を磨針と名づけた緣起を土人に糺してみると矢張り大師に基いて居るのが奇妙である、土人の語る所によれば何でも弘法大師が若年の頃修學の爲めに東國へ下らんとしてこの山を過ぎられた、峠まで來らるゝと一老人が頻りに

大きな金の棒を砥で磨つて居る、大●●は餘りその所作が不思議なので、件の老人に向つて何の爲めに金棒を磨るのかと尋ねらるゝと老人が嚴かに應へるやうには、これを磨り減らして針にしようと思ふてと言ふたかと思へばもうその姿は消へて了まつて見へなかつた。

大●●はこの老人こそ尋常人にあらずして人は切瑳琢磨の必要と辛抱の肝要なるとを訓誡して呉れられたのぢやといたく激奮せられたと云ふ逸話がある、この逸話から名づけ磨針峠と申すやうになつたのぢやと委しく語つた。

成程、大●●は入唐以前に南海、近畿の勝地ばかりでなく遠く東國地方へ行脚せられたことがあつた、或傳記に由れば伊豆の桂谷に於て魔障を退治せられたと記されてあるのもある。桂谷と云へば現今の修善寺である、大●●は若年の時分に錫を此地に泊め少時滯在して温泉を拓かれたようで同地が今日の繁榮を見るに至つたは大●●の賜である。

然るに弘仁十年大●●が再び東北の行脚を企て、秋の初め果隣、眞濟等の弟子を伴ふて高雄を發向せられた。曩に高野の靈地を得て草庵を結び、殊に去年は彼山にて越年を試みもう法旗を立つる根據地が出來、且つ近畿は稍布敎の實績が擧つて來たから更に眼を轉じて東海東山の方面に法雨を霑さんとの意であつた。

又、副因とも見るべきは當時天台大師が山門に戒壇を築き圓頓戒を授けんことを上奏せられたるに南都七大寺は大に激昂し迷方示正論を出して反抗した。北嶺からは顯戒論を著して雙方の法論は日に〳〵熾んになつて來る、當時傳敎

大師の威望は頗る盛んであつたが南都の餘勢も亦劣り難く、龍虎相讓らず、南北相持して何れも下らぬ。

この時に當つて稍もすれば大師をその渦中に投ぜんとする傾向があるので大師はその干與を厭ひ遠く去るに如かずと敬遠的態度で行脚に出掛けられたのでそれ等の法論も副因となつて居るのであろうと思はる。

斯くて大師は行く〳〵密敎の法憧を翻しつゝ曾つて往事の遊跡伊豆の桂谷に錫を駐め、法緣を結びて三密加持の法を弘通し、翌年の夏は勝道上人の舊跡補陀羅山に上り、二荒を日光と改め、それより歩を奥州、北越に運びて法雨を霑し、其足跡殆んど及ばざるなきまでに行脚化益せられた。

大師が東北の行脚から高雄へ皈へられた一年の後であつた。十一月には主上

が親しく宸翰を染めさせられ傳燈大法師位を賜ひ、内供奉十禪師に補せられたこれ大師四十七歳の時であつた。

翌くれば弘仁十二年の四月、讃岐刑部少丞路眞人の濱繼から次のやうな上表文を差出した。

上表文

僧空海は部下多度郡の人なり、行ひ離日よりも高く、聲彌天に冠す、山中に坐禪すれば鳥巢ひ獸狎れ、海に道を求めんとて虛しく往つて實ちて歸りぬ、茲に因つて道俗風を欽び民庶景をのぞむ、居れば則ち生徒市をなし、出づれば則ち追從して雲の如し、今や久しく舊土を離れ常に京師に住す、百姓戀慕することに實に父母の如し、若し師の來を聞かば部内の人乘履を倒にし來つて

迎へざるはなし、伏して請ふ別當にあてゝ其事を成さしめ給はんことを

讃岐國那珂郡に滿濃池と云ふ大な池がある、この池は三十六谷の溪水を呑み宛然汪洋たる湖水のやうである。さればこの池の爲めに灌漑を受くる田は一萬町もあると云ふのである、けれど一旦強雨に會へば堤忽ち決して三郡盡く水底に陷り、耕田磧と變じて了ふ。一年この堤防が決潰してより數年を經ても修築することが出來ぬ、これその業が大きくて人の少い所以である。刑部は滿濃池の修池使となりて經營をさゝ怠りなけれども更に實蹟があがらぬ、此に於て諸郡司から上奏して大師の下向を仰ぐやうになつたのである。

當時、大師はわが國所造の佛像がその形まちゞにして殆んど眞容を失して居るのを歎き、一々經典に照して確然たる諸尊の像を刻せんとて沒頭して居られた。

けれど讃岐國司が下向のことを上奏したるを知り自ら進んでその任に當らんことを諾せられた。元より讃岐は父母の國で大師としてその地の困憊を默過するに忍びぬのである。又一方には先年來の南都北嶺の法戰未だ決せぬからであつたのであろう。

いよ〳〵大師は滿濃池別當となりて弘仁十二年五月讃州へ下られた。州民は平素から一方ならぬ渇仰して居る大善知識の下向と云ふので大師の着かるゝ港の濱邊へ雲のやうに集つてお迎へしたと云ふ。

その翌々日から池の淵に法壇を築き嚴かに修法が始まつた。入唐求法の善知識、傳灯大法師位の高僧がわざ〳〵下向せられての修法と云ふので遠近の農民

はわれ後れじと池に集つて來る、この幾千萬の男女が大●師の修法に同じて土を盛り簀を運ぶ。今まで人の少ひ爲めに屢々成らんとして成らざりし決潰の箇所も、見る〳〵土は高々と積み上げられ、幾千萬の人が踏みつけては土を盛つては踏むので、土は堅く踏みしめられて石のやうになり、これならば如何な風伯龍神も再び破壞することは叶ふまじと見へた。

元より池は汪洋として湖水のやうであるから隨つて周圍の堤防も其延長幾里に渉つて居るが、その蜿蜒たる堤も大●師修法の効に由りて丘のやうに築き上げられた。土人は此に再生の思ひをなしいたく大●師の德を拜謝した。

今昔物語に云はれて居る源隆國の書いた書の中に讃岐國那珂郡に滿濃池とて大なる池あり、高野大師其國の人をあはれみて人を促し築きたまへる池なり、池のまはり遙かに堤は甚だ高かりければ池とは覺へず海などのやうなり。

これ等に照してみても州民は永く大●師を德として忘れなかつたとみへる。流石の大工事も日ならずして竣功したので、大師の駐錫は極めて短時期にして入洛せられた。州民はさぞ温容に接することの久しからざるを恨んだであろう。

曩に藤原藥子の亂で落飾し玉ひ永く舊都の一室に籠り玉ひし平城上皇は、弘仁十三年二月宣下して東大寺の眞言院を密敎の灌頂道場となし、上皇臨幸せられ大●師から秘密灌頂を受け玉ふ、これ吾朝に於て帝王が密灌を受け玉ひし嚆矢である、皇子高岳親王亦大●師に歸し給ひ

かくまでにたらまをしれる君なれば

但多藥多までになり上りける

と一首を詠じて落飾し玉ふた

乃ち大師●●は

言ふならく奈落の底に落ちぬれば
刹利も毘舍もへだてやはある

皇子は藤原藥子の亂の爲めに皇嗣を廢せられ玉ひければ蓋し大師●●は佛敎の平等主義を諷して皇子の憂鬱を慰められたのであろう。親王は法名を眞如法親王と申し大師●●の入寂後幾くならずして宗叡●禪念等と入唐し、遙か流沙を渡りて天笠に到らんとて中途に薨去し玉ふた方である。

この年四月、大師●●は宮中に於て敕に應じ兩部神道を談ぜられた。

十四年正月十九日、主上には藤原忠仁を敕使として東寺を永く大師●●に賜ふて眞言の道場と定め、寺號を敎王護國寺と賜ふた。曩に高野の靈地を得て密敎の根本道場と定められたが、王城を去ること近からず爲めに玉体安穩、鎭護國家の修法地としては頗る不便であつたが、今や東寺を賜ひ、且つ灌頂院を立てゝ春秋二季結願灌頂すべき旨敕命せられた大師●●の喜び一方ならず、唐の大官道場の青龍寺を惠果和尙に賜つた例も思ひ出され敕諚の厚きに感泣せられた、

十月十日、更に大師●●の請ひを容れさせられ五十口の定格僧を置き、以て宗の經律論を弘通し、密敎の根本道場として同宗長者の住地と定められた。

翌十四年四月、主上には位を皇弟淳和天皇に讓り玉ひ冷泉院に於て大師●●より金剛界大曼荼羅の灌頂を受け玉ふた。この日橘皇太后宮、藤原冬嗣、良岑良世

等の百官亦法壇に入りて三摩耶の戒を受けた。

南都の戒壇に對抗して大乘圓頓戒壇を叡山に立てんとして南都七大寺の反感を買ひ、圓頓戒論を著して龍爭虎鬪の觀をなし克く法戰に努めた傳敎大師は遂にその事を遂げずして去年六月四明嶽の雲に沒した、時に五十六であつた。

勤操大德老ひ、坐主逝き、南都の碩學亦凋落してなきが如し、されば朝野の信仰は舊佛敎を凌駕し靡然として大●●大師一身に集注し、密敎弘通の機運は今や純熟の境に入つて來た。

……

大師この山ひらかせ給ひて、堂建させけるに、木の道の工、文字のことを知ればしるし合すべき理なしとて、伊呂波の四十八字を敎へさせ給ひしより、末の世の人のたすけにもなりぬときこゑ侍る

—(頓阿法師「高野日記」)—

第十一回　神泉苑の祈雨

弘仁十四年に改元せられ天長元年となつた。この春天下大旱して雨降らざること實に百餘日、されば農民は耕作を失ひ、草木は枯死し、穀種もやがては盡きんとした。主上殊の外軫念あらせられ、大●●大師に敕して雨を祈らせんとし給ふた。

然るに南都の山階寺に守敏僧都と云ふ沙門がある、戒行長け、薰修數多の日を積み南都に於ては時めいた大德であつた。然るにこの沙門は大●●大師の德光日日その厚きを加ふるを深く嫉み、折もあらばその德望を傷つけ以て己れ薰修の功を誇らんとして居つたに、這回端なくも祈雨の詔敕が大●●大師へ下らんとする由を

きゝこれよき折と自ら上奏し、貧道は空海に比すれば年臈法臈共に過ぎてあればこの祈雨の詔敕は貧道へ下されたし、左あらん時は必ず降雨を祈り効験をあらはすべしと、此に於て公郷僉議の上一と先づ守敏僧都へ詔敕が下つた。

僧都は身に餘る光榮と、卽ち潔齊して一七日を期して祈願を罩めた、果してその効驗あらはれ滿願の夕より一天陰雲閉ざし洛中殆んど暗夜の如く、忽ち雷電轟き沛然として車軸の雨を流した。けれどこの降雨は東西の京のみで更に城外に及ばなんだので枯死に頻して居る郊外の農作物には更に効驗がなかつた。あはれ守敏僧都は少からず面目を損した。

此に於て再び祈雨の詔敕は大●●師へ下つた、大●●師はこの詔敕を拜すると共に神泉苑で築壇修法すべき旨上奏した。この神泉苑と云ふは桓武帝が遷都の砌周の文王の靈囿に準じて方八町の園を築き玉ふたその中にある靈池である。曾つて●●大師は去年の秋、嵯峨天皇の召しに由りてこの池に遊び神泉に彳干して物故を觀る、心神恍惚として歸る能はず、高臺は神の搆へ人力に非ず、池鏡弘澄として日暉を含めり、鶴の響は天に聞へて御苑に馴れたり、鵠の翅は且らく戢めて幾か飛ばんとす、遊魚は藻に戲れてしば〳〵鈎を呑んとせり、鹿は深草に鳴いて露衣を霑し、一翔一住君德に感ず、秋月秋夜空しく扉に入る、草を銜み梁を啄み何ぞあらざらん、鎗々として率い舞つて玄棧にあり

蓋し大●●師は乾臨閣で終日淸遊した雅趣を賦して奉獻したのであるが、その曾遊の神苑は唯形をかへざるのみ、淸澄な靈池は鏡の如く高臺の甍を浮べて居つた

に今や水減じて游魚姿を潜め、草木漸く枯色を呈し、而も雲霓影を沒して烈日焦くが如し。今にして降雨を見ざれば草木國土遂に焦土と化し其殃恐らくは甚しからん。

去年に變つたこのあはれの分野を目擊した大師●●の決心は眉宇の裡にあらはれ心身の續かんがぎりはこの天災を和げんものと法壇に向つて嚴然と結跏趺座せられた。法衣の袖は天日に映じ、水晶の念珠は戞々と響いた。大師●●の手には既に法印が結ばれ、やがて請雨經の讀經が始まり音吐朗として經題は大師●●により て發せらるゝと、實惠、眞雅、眞濟等の上足の法弟を始めとしてすべて十四人の弟子は悉く池に面し一齊に讀經に取りかゝつた。その聲微妙にして或は高く或は低く、一清一濁哀婉にして雅亮、池水爲めに湧き草木爲めに動き、迦陵頻伽の聲も斯くやあるまじと覺へた、やがてその聲次第に綾く次第に低く嫋々として終つた。

すると大師●●は靑龍寺相傳の請雨の法を行ひ、合掌瞑目せらるゝかと思へば頻りに密呪を唱へ、水印を結びその體頗る殊勝である、これぞ無熱池までも達し必ず感應あるべしと思はれた。けれど第一日も過ぎ二日三日も何時か過ぎ去つたが何の靈應もない。

四日も過ぎ五日も來た、けれど烈日は更に焦げんばかりに照り渡り天空には一片の雲霓も見へぬ。大師●●の祈請は退轉なく、あらん限りの精を盡し心身を凝らして續けて居らるゝ。

祈雨の數日は七日間と期せられてある。それが六日も暮れ果てた、元より權

化の大徳であれば、たとひ今までは降らずとも滿願の日には降雨するに違ひあるまい。岐度今霄は一天陰雲濕り明日は甘露の雨に浴するであろうと洛中は更なり近郊の噂を聞いた程の者は皆期せずして夜の空を樂んで望んだ。けれど滿天一圍の雲なく、星斗明かにして金沙の如く、銀河長く流れて細波見へんとし失望と不安は萬人の胸を覆ふた。

主上の軫念は更なり、公卿一同顔色がない、只沁々睨々として天空を望むばかりである。實惠、眞雅の上足の弟子は不安の色に沈んで居る。斯くまでに心身を凝らし氣力を渴し、而かも晝夜退轉なく請雨するとも今日に及んでもその効驗のないのは何でゞあろう、いよ〳〵明日は滿願である、若し結願に効驗ありとすれば今宵からその兆しはあるべき筈である、それにも拘らず星斗欄干として光る聊かの陰翳なきはいよ〳〵祈雨の効驗はないのであろうか、若し結願に及んでも降雨がなくばわが師の身に取つては實に由々しき一大事である。

曩に守敏僧都が祈雨一七ケ日に及び滿願の日は滿天陰雲閉ぢ雨は車軸を流すが如く降つた、けれどその効驗は洛の東西に局りて更に城外には及ばなんだから詔敕は再びわが師に下つたのである、これわが師の德を禁闕に於ても深く信じ給ふからである。然るに明日はいよ〳〵滿願で餘すは只一日なるに晝は爛として赤日照り、夜亦一片の雲を見ざるは降雨の程も覺束なかるべし。そも〳〵わが師は何と思召し玉ふや、何を信じ給ふや。

危いかな請雨の法や、一應わが師に謀つてみんか、いな〳〵憖じいことを言上して却つてわが師の信念を狂し奉らば一大事である。先づわが師の爲し玉

祈雨の結願

ふまゝを拜し奉るに如かずと遖が高弟だけあつて實慧法師は人知れず仲々氣苦勞して居る。

けれど確乎たる信念のある大●●師は更に心弛まず、誦經了れば水印を結びて密呪を唱へ　所謂眞言秘密のあらんかぎりを盡して餘蘊ない。

いよ〳〵滿願の日が來た。大●●師祈雨の修法も今日が終りである、けれど滿天更に雲霓を見ず、朝暾は金色を放ちて東山に顯れて一點翳す物がない、時は次第に移り辰も過ぎ己も來た、實慧始め衆僧は等しく絶望の溜息を洩した。大●●師亦怪み忽ち入定してその理を究めらるゝに果せるかな、豫ねて大●●師の威德を嫉視して居る守敏僧都が呪力を以て諸龍を水瓶の中に封じ籠めて自由ならしめぬからである、但し無熱池の龍王のみ守敏の鈎召に洩れてあるを知つた大●●師は直ちに定から出て茅草を結びて龍形を作りこれを壇上に据へ又始めの如く祈請を罩められた。

龍神池上に現る

大●●師は時やよしと覺しけん、前なる香爐に一抹の香を薰じ玉へば香煙淡然として池上に騰り、水瓶を傾けて池に注がれた。更に水印を結び、密呪を唱へらるゝこと少時……實慧は思はず聲あげて

『アラ嬉しや祈願成就しにけり、池上を見給へ』

この叫びに驚かされた弟子の眼は齊しく池上に注がれた。茅草で作られた池水の龍の頭の上へ七八寸の金色の龍神が顯れて居る、今まで不安に不安を重ね、絶望の淵に沈んで居つた法弟はこの不思議の龍神を目擊し思はず莞爾と笑みて悅びの色をあらはした。この怡悅はやがて敬慕と變じひとしく大●●師を伏し拜ん

た。

●大師●は一同を顧み給ひ

『あの池上の靈姿が眼にうつるか』

『如何にも不思議の姿にござります』

『あれこそは善女龍王と申して密敎の奥旨を敬して無熱池より遙かにこの神泉に徒り栖みたるものなり』

弟子は師の說かるゝを謹んで聞いた、やがて實慧法師は恭しく頭を擧げて

『應驗は何時頃よりあるべく候や』

●大師●は憂々と念珠繰りながら

『善女龍王は常に慈心に富み、且つ今や請雨經納受の爲め來現してあれば應驗は今一と時の內にあらはるべし』

斯く龍王の說明を一と通り了つた●大師●は又誦經、密呪に取りかゝりて餘念なかつた。

龍王出現の旨苑の雜司から傳奏に及んだれば須臾にして宮闕よりは和氣眞綱を敕使として種々の幣物を供へ龍王を供養し玉ふた。

時は刻々に移り午も過ぎて半時と經たぬ中に西の空に當つて一片の陰雲あらはるよと思へば看る〳〵墨を流したるが如く滿天暗雲充ち、忽ち雷電を起し、閃々たる電光は黑雲の中より洩れた、それと共に沛然として豪雨下り池水充ちて大壇に到り滂沱たる甘雨は車軸を流した天雨ふらざること百餘日に及び烈日草木を焦し、池水涸れ、田園將に枯死せんとして天殃に泣いて居つた

大師少僧都を授けらる

に強雨三日に又び山川草木再び春色を呈し萬民ひとしく蘇生の思ひをした。

主上は深く大●●の法徳を賞し給ひ律師を經ずして少都僧に補せられた、蓋し異數の超越とせられた、大●●師は再三これを拜辭せられたけれど遂に許されず殊遇に感泣して拜受せられた、これその年の四月上旬であつた。

この神泉苑と云ふは乾臨閣と名づけられて主上遊覽し玉ひ、詩酒の興を添へ玉ふ爲めに設けさせられ、嵓泉の流涼しく、水三伏の夏を消し桓武以來世々の主上これを愛でさせられたが、大●●師修法の後は龍神潛宅の池となりたれば、これを崇め給ひ、天旱の災に當つてはこの池を洒掃して祭典を龍神に奉り眞言宗所屬の大徳をして祈雨せしめらるゝが例になつたと云ふ、蓋し大●●師の修法に做ふのである。

伊豆修善寺には大師の遺品が澤山あるさうであるが中にも大師が爪先にて彫られしと云ふ爪彫版木と云ふ珍品がある。又同村の日枝神社の神體も大師の作と云ひ傳へて居る

第十二回

智泉の終焉

大●●師門下の秀才智泉は天長二年春から重い病の床に臥した。智泉は大●●師の姉君千枝の方が嫁いで居られるゝ讃州阿野郡綾川の畔、瀧の宮の萱原某の子で、延暦八年二月十四日呱々の聲をあげた大●●師が肉親の甥である。

丁度大●●師が二十五歳の時であつた、阿波國に大瀧寺が建てられたので、大●●師

とは因縁の淺からぬ勝地であるから自ら佛像を刻んで山上山下の五ケ所に安置し、そして少時草庵を結んで開眼供養せられた、事果て、大師は錫を讃岐に迂げ兩親を省せられた。

その序に姉君の嫁ついで居らるゝ萱原家を訪れられた時愛くろしい十歳ばかりの雅兒が大師の側へ寄つて來て懷しそうに一禮した、大師はその悧巧そうな姿をながめ莞爾として

『姉上、この賢しい雅兒は御身の子にておはすか』

『さなり、さなり、御身の爲めには甥にて侍る』

大師は手を伸べて雅兒の手を執つて

『今までこの愛くろしい甥のあることを知らざりし愚かさよ、して名は何と申すにや』

姉君は稚兒の方を見遣りつゝ

『智泉と呼び玉ふべし』

『幾歳にて侍る』

『十歳になりたるなり』

大師はつく〴〵と智泉の姿をながめつゝ

『智泉とな、如何にも智泉らしき姿にこそ』

讃められた智泉はパッと顔を紅色に染めて俯した、やがて智泉の父は端然と座して次のやうに語つた。

『これが第一誕生を迎へた翌日に候、突然口を開いて、父上今日は釋迦如來の

涅槃の日に候へゝ來世の樂果を得申さん、稚兒は出家して衆生の苦を救ひたく候と、その言ひ方と申し語句と申し仲々二歳の稚兒の言ふことゝは覺へず我も驚きのまゝ稚兒を見遣り、吾兒は如何に變りつるよと申せば、稚兒は智泉に候と申したるが限りにて其後は更にかゝる言句を申し出さゞりしが元より二歳の赤子にて舌も廻らぬにこれだけのことを告げたるは如何にも不思議にて候、爾來その名を智泉と呼べば自らも心得て應ずることにて親としての吾等も不思議に覺へ侍るなり』

それから父は智泉が天稟の才能を具へて群を拔いて居る始終の樣子を委しく語つたので、大●●はそれを聞いて少からず心が動いた。

『この稚兒の前途こそ樂みものに候、法嗣として置かば如何に恃みとならん、わが身に賜らずや』

父の萱原は少時思案に耽つて居つたが、やがて莞爾として口を開き

『御望みとあらば面倒を取り玉へ、稚兒の將來は御まかし申すべし』

大●●は滿面悅びの色を湛へて

『予は今や微々たる一沙門に候へば暫し石淵の勤繰大德に托し申して研磨させ將來はよき法師といたすべければ必ず煩ひ玉ふな』

智泉は最前から大●●と父との間に成立つた契約を聞き澄し大師●●の膝に寄り添ふて寸時も離れず、ニコ〳〵として愛くろしい笑みを洩して居る、父の萱原は傍らなる妻を顧みつゝ

『奧や、智泉も今年はすでに十歳を迎へぬ、たとひ御僧の求めなくとも來年あ

たりは伴ひて入洛し御僧に托し申さんと思ひし矢先なれば、今日ゆくりなくも御僧の御來錫を得たるはこれ宿世の佛緣と申すもの、幸ひ智泉も望み居る樣子なれば、今日を門出の吉日として面倒を取つて貰ふては如何に』

母、の千枝は流石女性のかなしさには最前から早や目を潤まして居る樣子。

『今までは何の考もなければ支度もし侍らじ、それに今日に今日と申しては餘り急ぎのやうに候はずや、時期を計ひゆるり支度して伴ひ玉ふては如何にや』

智泉はッカ〳〵と母の膝元へ走り寄つた。

『喃母上、思ひ立つたが吉日、今日ゆくりなく叔父樣の見へしが佛緣の兆しに候、時期を計つてと申せば遂に出家の日はなかるべし、且つ三衣一鉢が沙門の常なれば、憖じい支度は却つて修法の妨げなれば今父上の御言の如く今日を佛緣の日と思召し許して玉はれ』

母、はます〳〵咳き込んで來る涙を押し拭い

『汝が左程覺悟して望みつるに强いて止むは出世の妨げとなるべし、さらば叔父樣の御世話になつて名ある沙門となつて玉はれ、母、はそればかりを樂みとすべし』

斯く兩親の承諾を得た智泉はいよ〳〵大●師●に附屬し、其夜は四方の語り草に短からぬ秋の夜も盡きぬはなしに明けぬれば、智泉は兩親に暫時の別離を告げ怡々として大●師●に伴はれた。

國を去つて上つた智泉は直ちに大●師●の乞ひに由りて勤操大德の門下に入り琢

大師智泉に既く

麿の功と天稟の才能とは忽ちあらはれて延暦二十二年十六歳にして登壇授戒し
爰に天晴の沙門となり得た。

爾來才學共にあがり、大●の爲めには釋迦と阿難の如く、顔回の孔子に於けるが如くその愛は益々加はり、密教の秘奥を附屬し眞言宗の法梁としては智泉を措いては他に求むべからず、一山の長者として讓るべきは斯人にこそと深くその將來に囑目して居られたにも拘らず、智泉の病篤しと聞かるゝや大●は愕然としてその枕頭に見舞はれた。

一門の秀才智泉はあわれ色は褪め艶は失せ、頬は皮を殘して眼は深く落ち入りて、昔の相好は全然失せて了ひ、大●の姿を見るや早やその窪んだ目は潤んだ、大●はやをら手をのばして其瘠せた額を撫でつゝ

『智泉よ、汝宿世の佛緣淺からず、當來はまさに都率の內院に生●べし、汝知るや否や生死の事大は覺知を離れて而かも覺知の中にあり、故に道をはなれ道の他に覺知を求むるは邪見なり、覺知を離れて唯道のみを見るものはこれ聲聞緣覺のなす所なり、されば有無の邪見をはなれて心底の佛意を自存するこれぞ眞の玄極に達すと云ふべし、汝能く加味して正念に住せよ』

●●大師の慈誡甚だ切にして溫情言外に溢れ、聲涙共に下つた、智泉は師が親しく枕頭に訪れ懇篤なる慈誨を垂れらるゝに及び、一言謝意を述べんとて重き枕を擡げようとした。

斯くと見られた大●●師は痛くこれを遮りつゝ

『苦き中より謝辭を述べんとするは無用のわざなり、只臥したるまゝにて述ぶ

べし』

智泉は滂沱たる涙を拂ひつゝ

『弟子幼より佛緣厚くして沙門となりたれど、爲法不爲身の誡めに洩れ法に盡すこと能はざりしも、幸ひにして師命に從ひて普賢菩薩を禮し、諸尊の威儀を圖寫し奉りしことは心嬉しくも有難くも存じ侍る、若し母上に事知らし玉はゞ智泉は春秋三十七、法臘二十一年にて身まかりつるも身を佛門に入れ骨をこの靈地に留むるは、喜びの中の悦びぞと申して去りし由申しつかはし玉はれ、一人出家すれば九族天に生るとあれど行德更になき身にありては其義叶はず、父は何所へ生れ玉ひしならん、母の後生は如何にぞと念頭を往來するもあわれと思召せ』

智泉は煩悶の一部をその師に洩した、もう常命盡きぬれば加持も其要をなさず藥石亦効を奏せず、只精神の慰安を與へるより外はない、大師は潛然たる涙を拂ひ

『汝、都率天に生れなばやがては佛處を補ふに至るべし、然らば心の欲するに任せて應化し得べし又何をか悶へん、只自性の本源に住して正念に到れ』

智泉は大師を拜し莞爾として笑みを洩し

『さ承はれば胸の裡もすゞやかに侍る、只師の厚恩に酬ゆる能はずして世を去るの罪輕からず幾重にも容し玉はれ……』

這裡の消息こそ眞に美しい師弟の膠漆を表する所以のもので而かも宗教に由つて精神の秘奥から安住するに非ざれば味ふことの出來ぬ妙味である。

彼の親鸞聖人が曾つて法弟なる高田の覺信房が重病にて死に頻して居る由を聞かれ、わざ〳〵その枕頭に見舞はれた、成程覺信房は思ふたよりも病篤くもう命脈ば旦夕に逼つて居るやうである。

覺信房はわざ〳〵師の見舞を受け、その温容をヂロリと一瞥したのみで依然荒い呼吸の下から頻りに念佛を續けて居る、この時聖人は

『その苦しさげに念佛強盛の條先づ神妙なり、但し所在不審如何』

聖人の問ひは至極簡單であるけれども十分要領を得て居る、覺信が苦しい呼吸の下で一生懸命に唱名し一言の挨拶を其師に酬ひずして續けて居るのは一應結構なことである、去り乍ら淨土眞宗に教ゆる絶對他力の要は一念の信心にありて口稱の念佛にあるのではない、信念から流れて出る報謝の念佛ならば結構であるが、今覺信房が逼れる呼吸の中から稱名を怠らぬのは恐らく口稱の念佛を憑みとして居つて平素聖人が教へられた絶對の他力信心が宿つてないのか知らん、若し左あらん時は由々しき大事と見て取つた聖人は、但し所在不審如何と尋ねられたのであつた、この時覺信房は苦しい息を切り

『喜びすでに近づけり存せんこと一瞬に逼る、刹那の間なりと云ふとも息の通はん程は往生の大益を得たる佛恩を報謝せずんばあるべからずと存ずるに付て、斯の如く報謝の爲めに唱名仕るものなり』

この覺信の應へはよく眞宗安心の肯綮に當つてある、篤き病に臥し今や臨末に逼りやがて佛果を得る、その期は瞬間に迫つてあるされば刹那の間なりとも呼吸のある間は佛果の大益を得るやうに與へ玉ひし廣大の佛

恩を人界に於ての報じ了りと存じ、この苦しい息の下でありながら唱名して居ります、唱ふる念佛に力を置くのではなく報謝も瞬間に迫り忙しい爲めに何等應答の暇なく唱名申すなりとの意である。爰に於て聖人は隨喜の涙千行萬行、覺信の額を撫しつゝ

『年來常隨給仕のあひだの提撕、そのしるしありけり』

と喜ばれたとある。

私はこの美しい話を讀む毎に何とも云へぬ感じがするのである。精神の慰安は最も必要であるが、それは宗教に由るより他はないとの感じが事新らしいやうに起つて來る。

智泉は大●●師が親しく枕頭に臨まれてから七日を經た天長二年二月十四日病床に起つて印を結び、口に五字を切つて高野の南院で入寂した。大●●師はその死を聞いていたく慟哭して

『智泉の智德の廣道なりしことはわが門下隨一なるべし、實慧●眞雅にも易へがたき法嗣なりしに惜しいかな今や亡し吁、……』

實慧は大●●師同族の出、眞雅は大●●師の肉弟にして共に智行兼備の上足の弟子であつたが智泉はそれにも易へられぬとは大●●師が如何にこの人に囑望して居られたかを知ることが出來る。

智泉の死は密教の爲めには大なる損失であつた、けれど天才は多くその壽長からざるもので、智泉亦その數に洩ずして夭折したるはやがて敬慕の念を增す、其所に天才に對する憧憬があり、眞價がある、大●●師哀悼の文に『冀ふ所は

百年の遺輪を轉じて三密を長夜に驚さんことを、豈圖らんや棺槨を吾車に請ひ有働を吾が懐に感ぜしめんとは、哀いかな哀中の哀、悲しいかな悲しいかな悲中の悲』と叙べられた。智泉の遺徳躍如として光華を發するやうである。

……

生死に終りあり今生を穢土の終りと爲す
菩提に始めあり後世を淨土の始めと爲す　―(往生講式)―

第十三回

慈尊院の主

南都華嚴宗の第二祖に良辨僧正と云ふ方が居られる、仲々名高い人で高僧傳などには委しく記されてあるが、それに付て一場の奇しき因緣譚がある。

何でも僧正の生れ里と云ふは江州志賀郡であるそうな、兩親が一向子供のないのを悲んで近所の觀音堂へ日參して一子を授け給はるやうにと祈願を罩めた觀音樣もこの樣子をあはれと思召してか滿願の月から妻は只ならぬ身となり十月滿ちて玉のやうな男の兒が生れた。兩親は掌中の珠と大切に育て、そして觀音樣の申し子と云ふので小さな觀音の像を首にかけて置いた

然るに或夏の初めその子を臺所口に寢かして置くと何所からともなく一羽の大きな鷲が飛んで來て攫かんで行つた、鷲が兩脚の間へ赤子を入れてフンハリと屋根の上へ飛び上つた所を母親が見付けて

『アッ』

と叫んだまゝ驚きの餘り後ろへ倒れて了まつて所謂人事不省に陷つた了つた。

これを見た良人は吃驚仰天して水よ薬よと噪ぎ立て漸く蘇生した。

妻は息絶へ〳〵に今見し次第を述べて殆んど狂亂の態である、今まで妻の看護で氣も付かなんだ良人も赤兒の寢所を見ると成程モヌケの殻になつてある、これも妻に劣らぬ程驚いた。

『そ、そ、その大鳥と云ふは何れへ飛び去つたか』

妻はムックリと起き上つて來て屋根裏を指しつゝ

『この上へフンハリと飛んだまでは覺へて居ますれど、其後は更に覺へが御座りませぬ』

成程最もである、鷲の脚にわが子がブラ〳〵して居る姿を見たまゝでもう人事不省に陷つたからである、今度は良人の方が狂亂の体で庭の隅にあつた大きな棒を持ち出し隣近所の助力を乞ふて鷲の捜索に出掛けた。

山や林や大きな樹の上を隈なく捜したけれど一向見當らぬ、今度は何所かに喰ひ殘りの骨でもあるまいかと川の淵から野の隅まで求めたけれど一向それらしいものも見當らぬ。もう詮方盡きて了うてガツタリ落膽した良人は遂にそれが元になつて、病の床に臥しあはれわが子可愛や、鷲の恨めしさよとて狂ひ死して了つた。

後に殘つた妻は何と考へてもわが子が死んだとは思へぬ、何所かに生きて居るやうな心地がする、それで良人の歿くなつた後間もなく身を諸國巡禮の姿に窶し、せめて一目なりともわが子を見て親子の名乘りをしてから死にたいものと津々浦々まで捜す積りで志賀の里を發足した。

其頃、南都東大寺の義淵僧正と云ふが或夏の朝春日神社へ參詣せらるゝと、何所ともなく赤兒の泣く聲がする、僧正は不思議に思ふて弟子諸共に搜してみられると大きな杉の木の上に愛らしい赤兒が居る、驚いた僧正は木に登つて大事に懷き下ろし、幸ひ男の兒なので自坊へ連れて歸りわが弟子にせんとて育て上げられた。

この赤兒は何所から來たか里も分らねば名も勿論分らぬ、只印と見るべきは首に掛けてある一寸八分の觀音の像だけである、そこで僧正はこの赤兒の名を良辨と名を付けたが仲々悧巧者で、五六歳の時から讀み書きを敎へらるゝと一を聞いて十を知ると云ふ性で年の進むにつれて學問も段々と上達し、螢雪の功空しからず三十歳には南都に並び者のない程の智行兼備の高僧と呼ばれるやうになつた。

育てゝ貰つた義淵僧正が臨終の時の遺言に汝は何所の者とも、誰の子とも分らぬ春日の神木の上に居つた者であるが、但し目標とも云ふべきは汝の首に一寸八分の觀音の像が掛けてあつたが、その觀音の像を將來父とも母とも思ふて大切にせよと初めて身の來歷を洩して入寂せられた。

爾來良辨僧正はせめて父母が無事でこの世にあつたら會ひたいものであるとそればかり念頭に往來してあつたが、さりとて何方とも方角さへ分らぬに尋ねに出よう術もなし如何にしたらと日夜悶へて居つた。

一方僧正の母は淀川の川舟に乘るとその乘合ひの中で一人の老媼が聲高々と良辨僧正の噂をして居て、僧正は元鷲に攫まれて春日の神木に留まつて居られ

た、それを義淵僧正が拾ひ上げて育てられたら今では南都に並ぶ者のない程な高僧になられお天子様の師範に撰び出され玉ふた……と云ふはないしを聞いた僧正の母は、耳寄りのことを聞くものかなと年頃の様子を尋ねてみれば何でも三十歳餘りと云ふので指折つてみれば丁度それに相當する、母は若しやその良辨僧正と云ふはわが子ではあるまいかと打ち喜び、早速南都へ足を早めたが、母が着いた日は僧正が美しい輿に乘つて行列嚴かに春日神社へ參詣せらるゝ途中であつた。

母は、噂に聞けばその輿の中の人こそ目指す所の良辨僧正と云ふので、もう矢も楯も當てられず、恐れ乍ら少時御待ち下されませと輿の側へ進んで行き、年來の樣子を殘りなく語り出し僧正は若しやわが子にではましまさずやと尋ねた

良辨僧正は輿の中にて始終の物語を聞き、然らば何か證據があるかと尋ねらるゝと、母が答へて云ふには吾等夫婦は子のなきことを悲み觀音樣へ日參して設けた申し子故に常にその子の首には一寸八分の觀音樣の像を掛けて置きましたがそれより他に證據は御座りませぬ。これを聞いた良辨僧正は輿の中から飛び降りて巡禮姿の母に抱きつき、御師匠義淵僧正が臨終の時に、汝を拾ひし時に首に掛けてあつた一寸八分の觀音の像、これを父とも母とも思へと云はれそれ以來せめて一度會ふて親子の名乘りがしてみたいと晝も夜も忘れずに居りましたに、あなたが親でありましたか、母上でありましたかと母子共々抱き付きて名乘り會ひ爾來僧正は一日として定省を欠かれたことがなかつたと云ふて今に一の美談として殘つて居る。この話を長々としたは他ではない、大師の母

が高野へ來られ爾來大師●●は一方ならぬ孝行を盡されたが古今の高僧が孝道を全ふせらるゝは咸な其挨を一にして居るのは符節を合するやうである。

蓋し大師●●の母公が高野へ來られたのは智泉法師の寂後であろうと思はる、或傳記に由れば高野開基後間もない中ぢやとも、或は大師●●入寂前の一年ぢやとも傳へて居るが何れも確然たることは解らぬらしい。而しこの時は既に大師●●の父君及び智泉法師の母千枝の方は沒して居られぬことだけは明かである。

常から孝心深い大師●●は何とかして母公を迎へんものと望んで居られたに瓢然母公が杖に縋つて高野の山麓へ現れられた時には大師●●は如何程の悦びであつたであろうか、恐らく良辨僧正以上にあつたに違ひない。此に於て大師●●は山麓に慈尊院なる清庵を立てゝ母公を奉じ、山へ上下の節は必ず慈尊院へ立寄り親しく慰問して定省を欠かれなんだと云ふことである。

天長四年夏天下又大旱して萬民悉く憂へた。此に於て敕して畿内七道の諸國へ奉幣を行ひ、而して五月一日から三日間大極殿、清涼殿の兩殿に於て大師●●を唱導とし、百僧を召して請雨の祈禱を凝らしめられた。けれど赤日團々として一天更に雲霓を見ぬ。此に於て大師●●は東寺から佛舍利を宮中に奉じて祈られた。果して滿天油然として暗雲閉ぢ沛然として豪雨地を霑すこと數刻に及んだから、陂池浩々として草木青々たり。されば舍利の靈德と大師●●の精誠とは朝野ひとしく驚嘆したと云ふ。

この功を以て五月二十八日大僧都に任ぜらる。大師●●は再三上表して拜辭せられたけれど容れられず、大師●●朝恩の厚きに感泣して拜受せられた。

天長五年十二月綜藝種智院が建てられた、この建設に付ては大●●の檀越藤原冬嗣、左大將安世等與りて最も力あり。當時は私學校の設立勃興し、藤原冬嗣の勸學院、在原行平の奬學院、恒良親王の淳和院、橘氏の學館院、和氣廣世の弘文院、菅原大江兩氏の文章院等各名族は爭ふて設立した、けれどこれ等は單に一種の宗族的學校でその同族の子弟のみに敎育を施し以て一族の榮達を圖つたのみで上下萬民を敎育すべき平等主義の學塾は一として見ることが出來なかつた。

この他に大學、國學などの設けあれどもこれ等も官人の養成を主眼として居るから隨つて實際の應用に疎く、其他南北兩京の佛敎の講席は僧綱を目的とするのみにてこれ亦濟世利民の器にあらず、然るに綜藝種智院は元三敎院と稱せられて神●儒●佛の三敎を主として授け、傍ら衆藝に及ぼし以て經世濟國の人材を養成するが大●●の主眼であり理想であつた。

斯く大●●が佛敎の發展は更なり、百尺竿頭一步を進めて平民主義の私學校を設け以てわが文藝上に努力せられたる着眼の非凡なることは驚くべき事である

天長七年敕して諸宗の綱要を奉らしめ玉ふ。大●●卽ち十住心論十卷を著して獻ぜられた、十住心と云ふは眞言宗の極致であると同時にこれを以て諸法の判釋を下す、されば一面よりみれば十住心論は大●●の人生觀とも宇宙觀とも云ふべきであろう。今その概要を述ぶれば

第一異生羝羊心、異生とは凡夫、羝羊とは牡羊である、大●●は凡夫狂醉して吾非を悟らず、但婬欲を念ふこと彼の羝羊の如しと云はれて善惡を辨ぜざる下

劣のものにて所謂地獄、餓鬼、畜生、修羅に當る。

第二愚童持齋心、これは人間界に相當し他の教へによつて持戒の心を生ずると共に、善心漸く萌すを云ふのである。

第三嬰童無畏心、これ天上界に當りかの眞言行者三密の行法漸く增進する位に當る。

第四唯蘊無我心、十界に配すれば聲聞に當る。

第五拔業因施心、十界に配すれば緣覺に當る。

第六他緣大乘心以下第九まで十界に配すれば菩薩に當る、これは法相の住心である。

第七覺心不生心、これ三論宗の住心である。

第八一道無爲心、これ天台の住心である。

第九極無自性心、これ華嚴の住心である。

第十秘密莊嚴心、これ正に佛界にして眞言宗に相當す、秘密とは如來秘界の三密の行である。大師は顯藥塵を拂ひ、眞言庫を開く秘寶忽ち陳し萬德卽證すと云はれてある、從來の九種の住心は所謂遮情門で唯煩惱を拂ふのみなりしが、この第十住心は初めて自己本心の源底を知り萬德を卽證するに至るのである。

この十住心論は密敎の根本思想で而かも大師が眞髓を現したものである。されば少くも大師が哲學的方面を知らんとせば十住心論を究めざるべからず、今は唯名稱を列記してその概要を示したのみである。

俳聖其角が高野に上り女郎花の咲くを見て「餘所に咲け高野の奥の女郎花」と云へば坊の小僧聞き咎めて「名をかへよ高野の奥の女郎花」と短册に認めて出した、其角痛く驚き件の短册を守袋に入れ大師の指圖として崇めたと云ふ。

第十四回　女御の發心

六甲山上の清庵

見上ぐる背後は一帶の重巒奇峰で、前は汪洋たる海灣を厄し、磯に通ふ青松白砂の影を遠く日に霞ませて居る。うら〳〵と長閑に渡る春の日射に松の綠も宛然伸び立つやうで、時も知らずに囀り返つて居る雲雀の歌ふ共音の呼び交はしも却つて淋しげに聞ゆ。

三年程以前からこの六甲山の中腹へ清らかな庵をしつらひ移つて來た人がある。庵主と云ふのはまだ綠の頭髮くろ〴〵とした若い宮嬪らしく、小女房とも覺しき二人の女が朝夕まめやかにかしづいて居る。

左と右とには廻廊を繞らし、前には閑庭を控へ、清らかで寂びた一室こそ庵主の居間で、毎時も內には寂然として人なきが如く、只襖を洩れて心細く立ち迷ふ香煙一縷、折から微かに聞ふる憂々と念珠を爪繰る音と、絹摺れのする響きとが何となく奥床しい。

この庵主と云ふは如意尼と號して元は淳和帝の御寵愛淺からぬ宮妃でまだ三十にも滿たぬ女盛りである、生れは丹後の餘佐郡籠宮の祝部海部直が愛女で眞井と呼ぶ者であるが、父の直が十歲の時に洛へ伴ふて上り、某公卿の取り成しにて東宮の坊に宮仕へする身となつたが、遂には無二の御寵愛を蒙り、御踐祚と共に九重の奥深き宮に入り綾の衾に身を包むやうになつた。

けれど淺ましきは今も昔も變らぬ女性の身で、寵を一身に恣にした眞井の方は遂に奥深き後宮にて局共の嫉みを受け、それが爲め遂に錦の帷を遁れ出で人も訪はぬこの山に栖むやうになつた。

最早浮世には望みを持たじ、只道の爲めに身命を捨て行ひすまさんと飽まで殊勝な心を起した眞井の方は有髪ながらも優婆夷に恥ぢぬ行ひにて名も如意尼と改め、この山に隱れてより今年は早や三年になりぬれば、高野の聖僧を請じて灌頂を受け比丘尼たらんと決心した。

●●大師は高野の雪の解けたるを幸ひとして錫を六甲山に扞げられた、さても今日は大師●●の下向と聞いた如意尼は二人の女房を召し具して山を下りつゝ里近くまで迎ひに出で客殿に請じ入れた。

如意尼は日頃から望みつゝあつた大●●の登山なれば湛へ難き笑みを洩しつゝ心のあらんかぎり欵待した、

『このたびわざ〳〵ひじり下向を仰ぎ申したには、深き心願を叫はさせ玉はれと願はん爲めにこそ』

如意尼は水晶の念珠を繰り乍ら腑し目勝にて大●●へ自分の希望を洩した、大●●はこれに應じて

『やんごとなき使者を蒙り貧道何事かと存ぜしが、御身の心願とは如何なる御願ひが在すにや』

『曩に如意輪の法を授かり申してより怠りなく持戒申せば心の中はすでに比丘尼にかはり申さねど、この黒髪のあらんには未だ何となく心安く思へぬ節々

も待れば這度御下向に預りての黒髪を剃り落して密灌に入り智水に浴させ玉はるやうにと、これぞ妾が心願にて侍り候……』

●●大師は如意尼の熱心な心願を聞き瞑目の兩眼パチリ開かれた、

『若き身は總じて心の逸りが生じ易きものなり、されば菩提の心に住し戒行を持つは先にして、たとひ姿を變へ形を改むるとも淨行身に叶はず菩提の心を妨げなば何の効驗もあらじ、灌頂は道俗を問はず受くべきものなれば剃髪染衣は後にして、先づ智水に浴し心の曇りを滌がるゝがよからんと貧道は存ずるなり』

成程大師●●の敎訓は道理に合して居る、話は少し横道へ入るやうであるが眞宗第八祖の師蓮如上人の御一代記聞書の中に斯云ふことが書かれてある、（上人の

傳記は本傳說叢書第五卷にあり就いて見らるべし）

一、十方無量の諸佛の、證誠護念のみことにて自力の大菩提心の、かなはぬほどはしりぬべし御讃の心を聽聞申したきと順誓申上げられけり、仰せに諸佛の彌陀に歸せらるゝを能としたまへり、世の中にあまのこゝろをすてよかし妻うじのつのはさもあらばあれと、これは御開山の御歌なり、さればかたちはいらぬこと一心を本とすべしとなり、世にも頭を剃るといへども心を剃らずと云ふことがあると仰せられ候

蓮如上人が順誓なる法弟に訓へられたのも姿や形の如何よりも、菩提の心が必要であるとのことである、姿を變へると云ふことは第二第三の問題である、要は一心の如何に歸するのである、姿や形は如何にあるとも根本問題は心である

故に蓮師も形は入らぬことなり一心を本とすべしとなりと明快なる解釋を下された。

けれど如意尼が頻りに落飾を大●師に逼るは他に言ふべからざる苦痛が伏在してあつたらしい。

『師の仰せは理りには侍れど世にもいと悲しきは女性の身にて候、疾くこの飾りを落し申さばかゝる悲しさも絶へなんと存じ侍る故に候』

『見受け申せば芳紀もまだうら若く察せらる、まだ〳〵修行を積むべき年にこそ、一念更に迷ひの御胸の晴れ申さん時に、再び貧道下向し來るべし、先づそれまでは心靜かに行じ玉へ』

如意尼の年が未だ若くして圓熟の境に入らぬ爲めか、果た他に原因のあるあり

てか、大●師はその熱望を却けて落飾すべきことを容されなかつた。思ひに餘つて大●師を請じ心願を達せんとした如意尼の失望は一方でない。

『妾の身はまだ若く苦行は積み申さねどもつらきことの侍るまゝ心は疾くより比丘尼になり侍るなら、若し飾りを落さずば更に罪障重るのみにて、斯くては未來も思ひやられ心細く覺へ申候』

大●師はこの語り出を不審と思ひ、

『妾を變へずば更に罪障增すとは如何なる事情のおはすにや』

如意尼はパッと顏色を染めた

『妾が心を掬みて聞き王へば少時恥を忍びて聞へ申さん』

『語り玉ふてよくば承るべし心置きなく話し玉へ』

如意尼は今一身が苦しい位置に陷つて居ることを語り出した。

『妾は主上がまだ坊に在はす頃より御寵愛を忝くし日頃君恩の有難きを畏み如何にもしてこの海岳の洪恩に報ひ奉らんと思ひ侍りしに何時かな大奥の女御達の嫉みを受け朝夕心安からず、斯くては九重の春も春らしからず、やんごとなき方には濟まぬことゝは存じ乍ら、一身を世外の者となさば自然この嫉みも消へ申さんと、三とせ前の二月橘近守と二人の女房を伴ひ大内山を逃れ出で申し、急ぎに急いで南宮の浦に着き、斯くてそのまゝこの武庫の山に入りしにこそ、妾が去りし後も上の御寵愛はいやましに深かりけん、去年の秋御獵出御の砌、潜かにこの庵に臨御あらせられ、其後も度々有難き優諚を賜るに、このこと何時しか大奥に洩れ申して、果てはこの山寺を焼き拂ひ妾を亡き者にせんと計られしと聞き、身の毛も立つやうに怖ろしく思ひ侍る斯くては上の叡慮をなやまし奉り、他にも罪造らせ未來の苦患は如何あらんと思へば一日として緩かならず、若しこのまゝにしてあらば如何なる事の出來せんもはからられずされば急ぎ飾りを落さんと師を煩し奉りたるなり』

丁度淳和帝の踐祚の歳であつた、主上も后の宮も●大師●から親しく灌頂を受け玉ひし時、この眞井の方も五智の誓水に浴し大師●●から如意輪供を授けられ爾來懇ろにこれを持して居つた。

然るに主上の愛が加はるにつけて眞井の方は嫉妬の的となつた、けれど元より無上の君寵に浴する身なれば怨嗟の府となりながらも大奥に侍つて居つたが一夜靈夢を感じてから後宮を忍て六甲山に登りてこの淸庵に入つたのであつた

爾來、全く浮世の縁を絶ちて持戒堅固に行じて居つたが主上からは内使を賜り、屢々御消息さへ洩し給はることなれば、若しこの上叡慮を煩してはと決心し遂に●●大師を請じて落飾を乞ふたのであつた。

如意尼は心の底隈なく打ち明けて大●●大師に曝げ出したけれど大師は只頷かるゝのみで落飾は許されなんだ。

その翌日から大●●師は客殿に閉ぢて櫻木を以て等身の如意輪觀音の彫刻を始められ、凡そ三旬にしてその効を竣へられた。大●●師はこれを本堂に奉安し香を薫じて禮し玉へば、觀音はこれに應じて頷かせ給ふた。この靈姿を目擊した如意尼は思はず暗涙に咽んで靈驗に感じた。

大●●師が高野へ去られた後も有髪の如意尼は深くその慈誨を守り、持戒堅固に

て比丘尼にも勝つてあつた。

翌天長八年十月六甲山の金堂は出來上つた。長き廻廊を經て、庫裡、浴室、玄關まで莊嚴をきはめた。

この月の十八日、大●●師は再びこの山に現れ大殿落慶の事果てゝ後

流轉三界中　恩愛不能斷
棄恩入無爲　眞實報恩謝

如意尼の黑髮は截然として切り落された。これと同時に二人の女房も共に飾を下ろして爰に新らしい三人の比丘尼は大●●師から密灌を受け年來の素懷を遂げた。

承和二年三月二十日の曉、如意尼は一心に密呪を誦し、頭北面西にて靜かに